



“Earnest Words” Expressions  
「真剣なことば」表現編 //



# Earnest Words



釜ヶ崎芸術大学  
Kama Gei  
(Kamagasaki University of Arts)

特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋(ココルーム)  
Non-Profit Organization  
The Room for Fullness of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

“Earnest Words” Articles  
\\ 「真剣なことば」論考編

釜芸に寄せて 谷川俊太郎

大学があるんなら

巨大学もあっていい

反対に微小学もあっていい

微笑学や哄笑学や誇大学や無題学や兄弟学や

甘鯛学も縁台学もあっていいなら

世間はどこへ行ってもダイガクだらけ

でもこんなアホな語呂合わせから

世間へ世界へ宇宙へと打って出るのは

ここ釜芸だけ

名前に恥じず大きな釜で

色んな問題ぐつつ煮詰めて

たっぷり美味しい出しが取れるはず

知識も知恵も歌も絵も笑いも涙もごちやませの

釜芸汁を召し上がれ！





## Towards Kama Gei

Shuntaro Tanikawa  
(translated by Betty Nguyen)

If there's a university, there ought to be  
a great school of learning,  
a miniscule grade school,  
sessions of smiles, laugh class, exaggeration education,  
siblings studying, a school without titles,  
a school of tilefish and of school benches.

Regardless of destination such a school exists,  
but only with such a foolish array of word play  
bouncing into our worlds and skies

Kama Gei arrives.

In a wide cauldron with Kama to its name  
a spectrum of problems simmer down.

Down the dashi rich with  
knowledge, wisdom, songs, laughter, and tears, blend and  
Become full with the soup of Kama Gei!

# 真剣なことば

## 表現編 目次 “Earnest Words” Expressions contents

01	釜芸に寄せて 谷川俊太郎		
02	Towards Kama Gei Shuntaro Tanikawa		
05	序章 なんて、真剣なことば、なのか 上田假奈代		
	<b>釜ヶ崎で生まれたことばの作品</b>		
13	<b>詩</b> ころのたねとしてのつくり方		
	その、しゅんかん		
	土管の中に		
	ようかいの出る所 白Sへびの家		
	白紙		
	鳥の行動範囲		
	UFO一箱一〇〇円		
	天国にちかいはくし		
	かんとうだきっていったけど		
	花びらを感じる		
	汗		
	私のつばさは大きく強い		
	このまちにいらとり		
	年齢のせい		
	ハートの花びら		
	花より男子かんそう文		
	スマートはきらい		
	びわめさ		
	涙		
	悪いやつ、汝は蚊		
21	ころのたねとして、の、であいのたね 上田假奈代		
22	ころのたねとしての匂い 森田友希		
		24	
		<b>合作俳句</b>	
		釜ヶ崎まちなか合作俳句	
		「教室」あいうんセンター	
		「ジャングル」クラッシュクレコードバー・コールドム	
		「庭でひとりひとりひろってきた	
		ちいさなかけらをはじまりに」三角公園	
		「骨」スーパー玉出	
		「闘病」萩之茶屋商店街コインロッカー	
		「大岡信追悼句会」四角公園前のお店	
			31
		合作俳句一覧	
			33
		合作俳句の愉悦 西川勝	
			35
		お互いの暮らし 高木智志	
			36
		そのたびごとに、ちいさなことばと場をつくる 小川歩人	
			38
		<b>かるた</b> 釜ヶ崎・妖怪かるた	
		ゆるすまち、ゆるされるまちのつくり方	
		かるた読み札絵札一覧	
			51
		声と手が結ばれる 上田假奈代	
			54
		<b>歌</b> 釜ヶ崎で誰かと、うたをつくる	
		釜ヶ崎オ！ペラのテーマ	
		ふんが行進曲〜みんなの探検の詩 <sup>うた</sup>	
		ふるさとのうた	
		あなた	
		あたらしいうた	
			60
		合唱部によせて 高橋巨	
			61
		あとがき ひきあう孤独の引力のあいだで	

釜ヶ崎芸術大学を別の角度のことばで編む

80	Exiting the Cocoon Betty Nguyen 蛹(ちぢみ)を出る ベティ・グエン
77	釜芸の課外で 松本渚
75	「カマハン」のあった4ヶ月とそれから 田中均
68	釜ヶ崎芸術大学のデータ一覧

実施記録  
 おでかけ釜芸  
 これまでの助成  
 メディア掲載  
 テレビ取材  
 新聞記事

釜ヶ崎芸術大学[かまがさきげいじゅつだいがく]

2012年より大阪市西成区釜ヶ崎でスタート。「学び合いたい人がいれば、そこが大学」として、地域のさまざまな施設を会場に、天文学、哲学、美学など、年間約100講座を開催中。近隣の高校や中学校への出張講座を行う。展覧会など：ヨコハマトリエンナーレ2014、アーツ前橋「表現の森」(2016)、鳥の演劇祭(2016、2017)、大岡信ことば館「釜芸がやって来た！」(2016)招聘。https://www.facebook.com/cocoroom/  
 詳しい記録は、2017年 ▶ http://kamagei.blog.fc2.com/  
 2018年～▶ https://kamagei.tumblr.com/

NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム)

釜芸を運営するアートNPO法人。2003年、大阪市の現代芸術拠点形成事業に参画し、いまはない新世界フェスティバルゲートで活動スタート。「表現と社会と仕事と自律」をテーマに喫茶店のふりをしながら、さまざまなかたちで問いを重ねてきた。07年に市の事業は終了し、08年釜ヶ崎の端の動物園前商店街に拠点を移す。16年同商店街の南に移転し「ゲストハウスとカフェと庭 ココルーム」を開く。www.cocoroom.org

Kama Gei (Kamagasaki University of Arts)

Anyplace can be a university if there are people who want to study. We make our activities regarding the neighborhood as a university. Kamagasaki University of Arts is managed by a non-profit organization "The Room for Fullness of Voice, Words, and Hearts (cocoroom)". This is a community university and anyone around the world can join. We offer various kinds of workshops and lectures. Each lecture lasts two hours. Although we may speak in faltering English, please join us if you are interested. The entrance fee is based on donation. We upload schedules in English on Facebook, so please check them too.  
 https://www.facebook.com/cocoroom/

NPO The Room for Fullness of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

Cocoroom is an art NPO (non-profit organization) managing Kamagasaki University of Arts. Our activities started in 2003. Having roots in the community, Cocoroom is creating opportunities of meeting people with different backgrounds, expressing and studying each other. We opened a guesthouse in April 2016.  
 www.cocoroom.org

## 序章

うへだかなよ  
上田假奈代（詩人）

# なんで、真剣なことば、なのか

## 時間のかかること

「僕、ことばの力なんて信じない。お金の力を信じてる。だから、あなたにお金をあげたい」と電話の向こうは詩人の谷川俊太郎さん。二〇〇八年、釜ヶ崎（\*1）にココラム（\*2）が移ったとたん、これまで訪れていた人たちはぱったりと来なくなつて、谷川さんに「釜ヶ崎に来てほしい」と手紙を送つた。すぐ電話がかかつてきた。わたしは「お金も大事です。けど、谷川さんに来てもらいたいです。それで詩を書いてもらつて、釜ヶ崎に興味を持つ人が増えるように、つまり客寄せパンダに…」と口走つてゐた。

その三ヶ月後、本当に谷川さんは釜ヶ崎を歩き、「路上」という詩を届けてくれた。そして、六年後、「ヨコハマトリエンナーレ2014」に釜ヶ崎芸術大学（以下、釜芸）が参加することになったもののお金が足りず、三百万円の寄付を募つたさい、谷川さんから目標金額の三分の一が振り込まれていた。数年前のこのことばに突き動かされたのではないだろうか。

釜ヶ崎で喫茶店のふり（\*3）をしながら、表現が生活や人間関係にどんな風に関わるのかを実践し、そこで感じ考えたことをまた表現しようと試みてきた。釜ヶ崎には周縁の人々

が流れつき、無名の人生を貫く。そうした人々と出会い、拙いことばを、書きつづけてきた。ココラムで日々交わされていることばは、どこにでもあることばである。荒っぽいこともあれば、かぼそく、意味不明だったり、やや聞き取りにくい、受け取りにくいことばも多い。そして、このまちでもココラムでも、この社会ならどこにでもあるように、暴言や暴力、差別、偏見、一方的な性的な発言などもじつさいに散見される。そうした時にさまざまな工夫をして、抗おうと、わたしもまた声をあげていく。時間をかけて、お互いのことばを聞き取っていくと気がつく。さりげないその声は苦悩や諦念、憤り、歓び、深い感謝などに裏打ちされて、一瞬なんと答えていいのか、ことばに つまることがある。反応できず、何も伝えられず、その後会うことのない人も大勢いる。

最近ではすこし慣れてきて「いちいち、すごいね」と、答えていることも多いが、この言い回しもスタンプのようだと面白くない。マニュアルではない。こちらの聴く力が鍛えられているのは確かだ。結局、自分の感情の動きをとらえる訓練をして素直に応答することがいちばん落ち着く。ことばには、素直に答えるのがよい。

\* \* \*

この世にことばがあるのはなぜか、そんな問いをずっと持っている。こうして考えているのも、ことばか。考えていることを、なんとかことばに表そうとする。うまくはいかない。感じていることをことばにするのはもつと難しい。感じることをなくして、考えるのは難しい。ならば、いちばん最初、ことばはなかったのか。宇宙のどこかでことばが発明されて、それから世界は生まれたのか。

### ことばのみぶり

どうしようもない痛みや苦しみ、あきらめをなんども経験しながらも、ユーモアを忘れず生きることが信じていることば、それでいて平易なことば、ありふれたことば、そして、てらいのない声でやってくる。ことばのみぶり、というのがあって、それはその人のからだ全体からにじんでくる。

釜ヶ崎にいと、本当にさまざまなことばのみぶりに出会う。失敗した人、つらい経験を経てきた人、死んだことになっている人、話せない人、嘘のうまい人。支える仕事をする人にもさまざまながいて、一筋縄ではないかない。外からもさまざま経験の持ち主が次々とやってきて去る。

都市とは、ことばのみぶりが雑多にあるものだと思う。けれど、行き交う人が多く、誰もが用事のある（あるいは、用事のあるふりして）、じぶんの目的方向しかみていない都市では、ことばのみぶりは発揮されない。現在

の釜ヶ崎では、用事のあるような人は少なく、時間の隙間を持っている人が多そうだと、書きながらも、用事の多寡だけではない。その人がその身に持つ孤独の深度なのだと思う。

\* \* \*

ある陽射しの強い日、釜ヶ崎の大きな道で影の塊のように倒れているおじさんがいた。わたしは用事があり自転車で通り過ぎたが、引き返した。顔を知っている人だったので「どうしたん？」と聞いた。大きな犬が向こうを歩いている。「犬に倒されたん？」すると、倒れたままのおじさんが言い放つ。

「ちやうわ、地球の引力や！」

稲光のように詩の一節が浮かび、ぐいと地球が回転した。

万有引力とはひき合う孤独の力である

『二十億光年の孤独』（集英社文庫） 谷川俊太郎

\* \* \*

このおじさんは歩くのがますますしんどくなり、買い物帰りに出会うと、荷物を部屋まで届けさせられた。何度か小さな部屋にあらることになった。奄美大島出身の板前だったというその人の歴史を物語るような何かがあるわけではなく、最低限の生活のための空間が雑然とそこにあった。電話を持たないおじさんは救急車を呼びたいときはココールムにやってきた。スタッフたちは笑顔で救急車に手を振って見送った。出会ってから三年ほどたち、支援者から彼が亡くなったことを知らされた。葬式にいくと、支援者ふたりとココールムのスタッフしかいなかった。癖は強い



がユニークな人で、おそらく交友関係もそれなりにあったらうにと思うのだが、葬式は十分もたえず終わった。

### からだとことば

生きているとからだがある。死んだあととは、硬いからだがしばらくあるが、焼かれたり埋められたりして、骨の粉になる。ことばはからだと共にあるように、生きているときは思う。からだがないことばは生まれなからう。からだがないことばは生まれないからだ。しかし、死ぬと、からだはないが、話してくれた、書いてくれたことばが残ることに気づく。

釜ヶ崎に紙芝居劇「むすび」(\*4)というグループがあり、紙芝居のカラスの役とナレーションが絶品だったおじさんがいた。亡くなったときに遺族が遺体の引き取りを悩み、遺体は冷凍され、数ヶ月後に引き取らないという返事があった。お葬式では白い棺から水滴がぽとぽとと滴っていた。

「かあ かあ かあ」からはじまる「ふるさと」のうた[57ページ掲載]を歌うたびに、考える。ふるさととは何か。家族とは何か。水分をなくしていくこのからだ帰る場所はどこか。

住所がなく、家族がなく、じぶんの過去の話をどまったりくしない若者が二〇一七年の夏からココルームのゲストハウスの清掃バイトとして働いた。仕事を終えると、大きな荷物と寝袋を持って出て行く。どこで眠っているのか、尋ねると、柔らかく微笑むだけで、答

えない。気配を消す、というのはこの人の存在の仕方の特徴であったが、けして嫌な感じのしない気配の消し方だった。よく気がつき丁寧で優しい。彼はココルームで頼りにされ大事にされていた。釜ヶ崎の講座にも参加するようになり、はにかみながら歌ったり、俳句をつくったりした。

身を切るような寒さのつづく二月、突然姿が消えた。

一週間ほどして、警察から連絡があり留置場にいることがわかった。緘黙して話さない彼の代わりに、事情聴取を受けた。その後、暴行罪で起訴となり、拘置所に移される。拘置所で面会し、事件の様子を本人から聞くわたしは素人ながらに冤罪だと思う。弁護士に相談し、裁判所に通い、裁判官に手紙を書いたが、裁判でも彼は緘黙し有罪となった。

五ヶ月後、釈放され戻ってきた彼に三畳一間のアパートを用意した。以前のようにいっしょに昼ごはんを食べ、働いた。しかし二週間あまりで、また行方がわからなくなり、警察に行方不明者届(旧搜索願)を出した。家賃は一ヶ月分いれてあったので、月末まで待ち、彼の意思がわからないまま、部屋を片付けにいった。そこには眠った形跡がない。残っていたのは、わたしたちが差し入れた物と、拘置所で書いた手紙の膨大な下書き、手紙の送付先リストだけだった。リストには釜ヶ崎のもうひとつの支援団体とわたしたちのものが記されており、それ以外の連絡先はなかった。

彼と小学三年生のわたしの娘、わたし、三

人で水族館に行ったことがある。入館時に記念写真を撮られ売りつけられるのだが、わたしは買わずにさっさとのぼりエスカレーターに乗った。彼は店員に捕まったようだ。あがってこない。待っていると、彼から写真の入った封筒を手渡された。彼のいつもの姿、全身黒づくめ、フードをすっぽり被った彼と娘、わたしがおさまっている。

のちに、彼のことを全く知らない人がその写真を見て、「いい写真だね」と言った。そのいでたちは裏腹に彼の表情は柔らかく、微笑んでいる感じが全身から伝わってくる。

拘留所から出て再び働きはじめたとき、釜芸の合作俳句(\*5)に参加し、いっしょにくった。

こころお化け あたまもお化け 未知のお化け

この俳句の最初の五音にかかるテーマは「恋愛・恋愛」だった。彼が作ったのは最後の結の部分「未知のお化け」。

未知というものがお化けなのか、未知というわからなさがお化けなのか、もっと違う意味なのか、その意図はわからない。

今この瞬間、笑いあっていることも奇跡であり、その先の未来は誰にもわからない。地の底から、闇の奥から、心のどこかから、忍び寄る不条理があることを、それらの隙間なことばにならない未知のお化けが潜むことを彼は知っているのではないか。そのお化けに飲み込まれないよう、彼はからだひとつであることを自覚し、正直で、真剣な、信じるこ

とばしか使わなかったのではないか。

### 釜芸のからだと思案

釜芸はかちっとしていますが、中身はやわらかい。

経緯をすこし話そう。もともとこの企画は、二〇一一年、コカールムの「まちでつながる」事業(助成・ファイザー)をきっかけとしている。スタッフやわたしは、コカールムに持ち込まれる相談や問題に悩んだあげく、じぶんたちが解決するのではなく、専門家を講師に招き、場をひらくことで、ゆるやかにつながり、ことばにできるようになったことが大きい。また、地域の高齢化がすすみ、動物園前商店街を歩くおじさんたちは歩行器をつかうようになり、音が変わった。地域のおじさんたちがコカールムまで歩いてくるのが難しくなっていると感じた。おじさんたちが集住する萩之茶屋地域のあいりんセンター(\*6)のそばで、「まちでつながる」事業の表現のワークショップ講座を月一回九ヶ月間実施した。アルコール依存症のおじさんが全回参加し、最後に「酒はくすり(抗酒薬)でやめるんやない。人生の楽しみでやめるんや」。さらに、「二ヶ月一回では来月生きてるかどうかかわらん」と呟いた。それを聞いたスタッフの植田裕子がおじさんたちの生活のリズムになるような企画をと、「釜ヶ崎芸術大学」を考え、翌二〇一二年、四ヶ月ほどの期間限定で講座を組んだ。

釜芸を考えた当初、アートNPOの新参の

団体がこの街で「釜ヶ崎」と冠する事業を行うことには躊躇があった。この地域で暮らし、また支えてきた大勢の人々に納得してもらえらると思えなかった。しかし、地域も変わり目を迎えていて、正式な地名でもない釜ヶ崎という通称名は過去のものになりそうな気配も感じていた。釜ヶ崎に関わりはじめて十年ほどのコラムは、独自のスタイルだと思いが、歴史から学ぼうという姿勢を持ち、真剣にこの地域に関わろうとしている。わたしたちは釜ヶ崎には芸術の根源があると信じている。学び合う場を大学と言うなら、人生を学べる街であることは間違いなく、これほど大学らしい街はない。

釜芸はこの事業だけでは成り立たない。コラムが動物園前商店街で喫茶店のふりをしながら地域に根ざし、地域に開いた場を持ち続けていることによって、釜芸の二時間の枠組みが生きてくる。いまでは、釜芸はコラムより知られていると感ずることが増えた。かといって名称を変更しようと思わない。コラムのなかの枠組み・ことばの表れのひとつが釜芸であり、コラムと釜芸は車の両輪のようなものだ。

釜芸には参加しないけれど、もう五年余り裏方作業を手伝ってくれる釜のおじさんがいる。チラシの修正シールを何千枚と貼る、学生証を作る、チラシの発送作業。作業があるときは午前中は手伝いに、昼や夕方はお酒、いまはアルコールをやめてコーヒーを飲み

きてくれる。このおじさんに本当に助けられている。スタッフたちに軽口をたたくのがこのおじさんの楽しみようだ。二〜三年で辞めるコラムのスタッフたちをどのように見ているのかはわからないが、コラムという喫茶店のふりをした継続的な場があることで、釜芸は成り立っている。

話は企画当初の頃に戻る。若いスタッフが釜芸を企画したことが嬉しく、わたしはじぶんの企画では躊躇していたような著名な講師にもオフアールし、そうそうたる講師が並んだ。その後、期間限定から通年になり、年間八十から百を超える講座数となる。ヨコハマトリエンナーレ2014への参加、台湾、アーツ前橋、大岡信ことば館などの展覧会もあり、外からの評価は高まっているようだが、組織の疲弊は激しく、スタッフが入れ替わる。釜のおじさんたちの高齢化は加速度を増し、おじさんの参加は激減する。

二〇一三年からは、あいりん(\*1)の六十五歳以上の生活保護受給者の社会的つながりづくり事業(主催:西成区)の連合体の一員となり、釜のおじさん・おばさん対象に年間九十回を超える表現プログラムを受け持つ。釜芸に似ているが枠組みは異なる。

コラムの運営状況は悪化し、打開すべく二〇一六年にゲストハウス事業を始めたが、コラムの組織内部はさらに混乱していた。カフェとゲストハウス事業と釜芸(アーツマ

ネジメント事業)をすべてこなせる人など、  
 そういない。当時、アーツマネジメント事業  
 についてはわたし一人で仕切っており、組織  
 としては限界に近かった。

釜芸の成果発表会である釜ヶ崎オ！ペラの  
 ふりかえりの集まりを持ったときに、事情を  
 話した。すると、釜ヶ崎在住ではない参加者  
 から「釜芸をなくすわけにはいかない、運営  
 側にまわる」と、手が上がった。アーツマネ  
 ジメントプロフェッショナル、略して「あま  
 ぶー」の誕生である。講座の企画の相談、チ  
 ラシの校正、配布作業、講座の進行なども任  
 せられる頼もしい存在である。最近では「か  
 まぷー」と間違えられて気に入っている。また、  
 二〇一七年からコロールムの組織体制も刷新  
 し、コロールムスタッフも釜芸などのアーツ  
 マネジメント事業に参画するようになった。

毎年、釜芸はさまざまな助成金を申請する。  
 受益者負担がのぞめる環境ではない。助成金  
 は単年度で、不安定な運営であることは変わ  
 らない。初年度の助成は大阪市、以降は全日  
 本冠婚葬祭互助協会、福武財団、大阪コミュ  
 ニティ財団など。地域の団体との共催、ブリ  
 ティッシュ・カウンシルやドイツ文化セン  
 ター、京都芸術センターなどとの共催の講座  
 もある。大阪市立大学とは二〇一六年から三  
 年間、二〇一八年は大阪大学と協働するなど、  
 さまざまな関わり合いのおかげで、釜芸が運  
 営されている。

きっかけは誰かの声だ。その声を聴いたこ  
 とから始まる。応えていくときに、ことばを  
 紡ぎ、わたしたちの持ち味をいかしながら挑  
 戦することが事業の道筋となる。弱さをひら  
 いて、やわらかくあること。その状況に合わ  
 せた微調整や修正が自然と加わる。これが釜  
 芸およびコロールムの身体性だと考える。

### 記憶と記録と人生のたね

釜ヶ崎のまちの変化は、釜芸にも現れる。  
 二〇一二年当初の参加者はほとんどが釜のお  
 じさんたちだった。ところが、近年では三徳  
 寮の会場以外、釜のおじさんの参加は極端に  
 減った。一番の理由は高齢化だと思う。それ  
 でも参加者数が変化しないのは外部からの参  
 加者が増えたからだ。

釜芸の時間の特徴は、釜のおじさんたちと  
 積み重ねてきた空気感、寛容と正直であるこ  
 とだと思う。受けとめられる。もちろん、な  
 んでも許すというわけではなく、お互い言い  
 にくいことがあっても言いたいことは言う。

釜ヶ崎は変わった。道端で寝ている人、座  
 り込んでお酒を飲んでいる人もいるが、いま  
 だに「怖いから行ってはいけない」と言われる  
 ことには違和感がある。最近、動物園前商店  
 街の朝屋は歩行器を押す高齢者の姿が多い。  
 夜は外国人ももちろんだが、地域外からの日  
 本の男性が目立つ。集団でハイテンション、  
 あるいは酔って歩いていることが多く、数年

前のほうが穏やかだった。萩之茶屋や太子のエリアは、朝に活気があり、夜は静かだった。今では、終日ガラガラゴロゴロと音がして大きなスーツケースを引いて歩いている外国人をたくさんみかける。

釜芸をきっかけに、釜ヶ崎に足を踏み入れる人もいる。世間やメディア、扇情的なSNSから見えてくる釜ヶ崎にまつわることはとは違う何かを感じるだろう。釜ヶ崎の空気を吸い、じぶんで感じ、考えることが大事だと思う。「であいと表現の場やねん」という釜芸の姿勢にさらに加わったのは、この街の記憶や記録、他者の人生のちいさなたねを受け取り、関わることだ。

ただ、「釜ヶ崎の記録・アーカイブ」とすぐに言ってしまうことに抵抗がある。過去のものとして線引きし、整理してしまうことはしたくない。記録することも大切だと重々思っているが、今ここで出会っていることを脇に置いて、記録装置を作動することに集中したくない。単に記録することではなく、みぶりのあることばとして真剣に受け取り、綴りたい。そうした行為を人生の「たね」と呼ぼう。お互いに影響しあう人生の「たね」。

なんとでも言ってしまうことばだから、一度きりの人生のことばだから。生きている真剣なことばを受け取る。孤独を引き受けた人たちの、ことばのみぶりをみつめる。呼吸する。応答する。呼びかける。いちにちを真剣に。

ていねいに。いつかどこかで「たね」は芽を出すだろう。



「かばん詩」相手のイメージの紙袋を選び、詩を書く

\*1 釜ヶ崎・あいりん：大阪市西成区の北東の簡易宿泊所街（ドヤ街）のあたり。地図にはない。「あいりん」は一九六六年五月に行政や報道機関が使用の取り決めを行った名称。最盛期は二百軒のドヤがあった。〇、六二km。釜ヶ崎の場所は人によって異なる。

\*2 ココローム：二〇〇三年浪速区新世界フェスティバルゲート「新世界アーツパーク事業」の枠組みで生まれたアートのNPO。二〇〇四年NPO法人化。二〇〇八年釜ヶ崎に移転。正式名称は、特定非営利活動法人こえとことばとこのろの部屋。www.cocoroom.org

\*3 喫茶店のふり：「ココロームのありようを、喫茶店のふり」と表すことが多い。誰でもふらりと入れることと、運営資金を稼ぐ仕組みとして捉えている。ふりのために、喫茶店の許可もとっている。注文なく、相談や話をするだけの人も受け入れているが、とくに制度の活用や補助金があるわけではないので、運営のために稼ぐ必要がある。困窮者のための「コンコーヒー」（二百円）など安いメニューも用意している。

\*4 紙芝居劇「むすび」：二〇〇五年に、「かまなびごえん」から改名した紙芝居劇団。釜ヶ崎に暮らすおじさんたちが中心となり、紙芝居と朗読と小芝居と歌や踊りをまじえた独特のパフォーマンスを行う。一期メンバーは全員亡くなり、現在は二期メンバー。https://www.facebook.com/紙芝居劇むすび-555219931247996/

\*5 合作俳句：二〇一六年の年末にひらめいた、ひとつの俳句を三人で作る手法。季語はなく、川柳や自由律俳句の要素もある。上田假奈代が編み出し、釜芸で西川勝さんが発表の仕方（必ず褒める）を加え、合作俳句の手法を確立。

\*6 あいりんセンター：あいりん労働福祉センター。日雇い労働者の就労斡旋と福祉の向上を目的に設置された。竣工は一九七〇年。

釜ヶ崎芸術大学で生まれた

ことばを味わう

ほとんど話さない人もいる

文字を書けない人もいる

耳の遠い人もいる

よく喋る人もいる

まわりにいる人たちと

ゆっくり息をつぎながら

ことばを記す

声にする

ことばを味わう

たましいが

ここで ゆれる

釜芸得意!

このころのたねとしての  
のつくり方

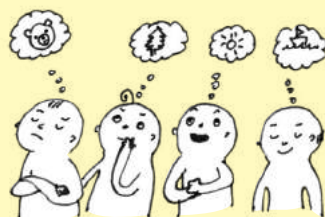
ひとりですつくりたくない他力本願詩(であいのインタビュー詩)。ふたり一組になってお互いに聴き合って、詩を贈りあいます。

用意するもの(人数分)

- ・紙3枚(画用紙やすし大きめの紙1枚、A4のコピー用紙など2枚)
- ・ペン(色のついたペンやクレヨンなど、メモ用のボールペン)



1 みんなで集まる。ウォーミングアップ。  
(例:呼ばれたい名前を言う、ストレッチする、近況報告をする、など)



2 テーマを話し合って決める。  
(例:思い出の場所、持ち物、具体的なもの、抽象的なもの、なんでも)



3 ひとりに3枚ずつ、紙をくばる。



4 ペアを決め  
(なるべく知らない人同士で)、となりあって座る。



5 約2分 テーマから、おもいつく絵をなるべく下手くそに  
(詩を書くためのスペースをあけて)描く。



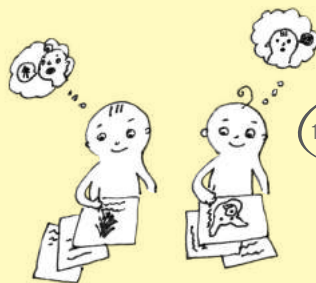
6 6~7分 その絵も手がかりに、インタビュー。  
なるべく具体的に質問する。  
答える方は正しさなどにこだわらず直感で。  
話したいことがあれば話す。  
質問者はメモをとる。



7 インタビュー交代。  
同じように。



8 朗読発表会:  
朗読のコツをおさらいしてから、ペアごとに朗読する。  
あるいは6人くらいのグループでシェアする。



9 10~15分 絵を描いた紙を交換する。詩をつくってみる。  
相手の絵、メモ、聴いたこと、うけとった印象などを手がかりに。  
まず試しに1枚の紙に書いてみて、推敲などして、相手が描いた絵の紙に清書する。  
日付、〇〇さんの話を聞いて、作者名をそえる。

假奈代の朗読のコツ

- ・文字ではなくイメージを読む。
- ・文末のあともう一呼吸分まで
- ・届きたい人の胸に声のボールを届ける
- ・耳を澄ませて聴く、読む人も、聴く人も

## その、しゅんかん

詩作「あきさく・ペロりん

話した人「鈴木友宏

おおきな さくらのき。

わたしには みえます。

なにか？

はなの そのしゅんかんがみえます。

わたしのともだちにも

みえます。

はなの そのしゅんかんが。

わたしたちにはみえるんです。

はなや、かわや、みずや、くうきの、

その、しゅんかんが。

きょうのこのいま、

その、しゅんかんはかこです。

いくつもの、いくつものかこで

いつぱいです。

でも、わたしや、わたしのともだちにとっては、

それらは たんなるかこではない。

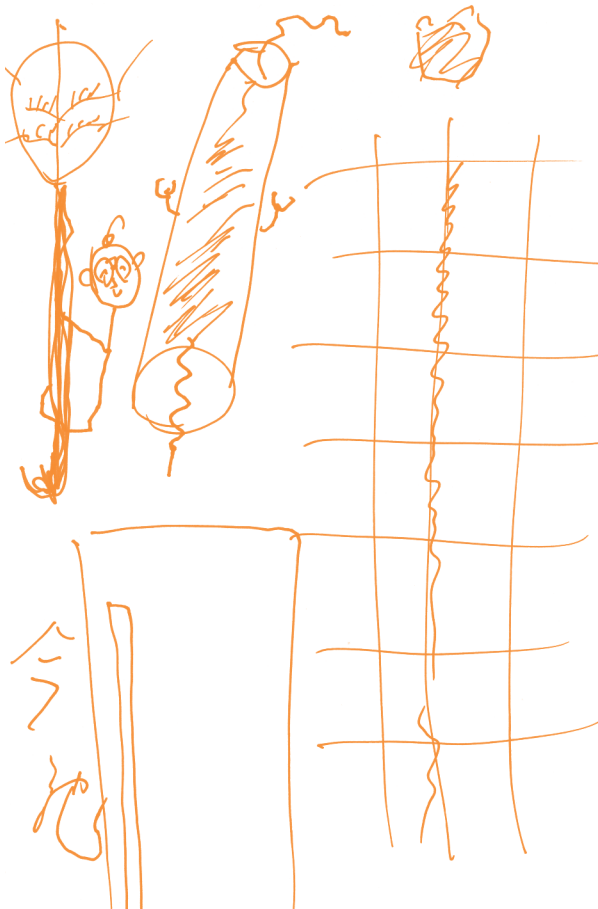
じぶんのきもち、

じぶんのいろんなきもちの

ひょうげんのかたまりです。

きえそいで、けっしてきえない

ひょうげんのかたまりです。



## 土管の中に

詩作「澄川

話した人「ななおかずお

阪堺線今池駅の隣にて

土管の中に奴は住む

人の肩にくつついては

悪口集め言いふらす

外に出るのは気分しだい

大好物はワンカップ

そいつの名前は

穴ぬけ ふぬけ

『つつぬけ妖怪』

## ようかいの出る所

白いへびの家

詩作「白井

話した人「岡本元晴



チンチン電車の音が鳴り響く

昨日までは、その音を共に聴く木があった。

人々を邪魔するとも、見守るとも言えない

斜めに生えた木だった。

昔からこのあたりの言い伝えでは、

この木の下にはほこらがあり、そのなかには

白い大蛇が棲んでいるという。



## 白紙

詩作 一上田圭佑 話した人 一恵美須屋(えびす丸)直樹

今ある色はにこっている

川のようにすぎ通っているのににこっている

いいものも 悪いものも

白紙に戻れるのなら 戻りたい

今までの人生を組み合わせて

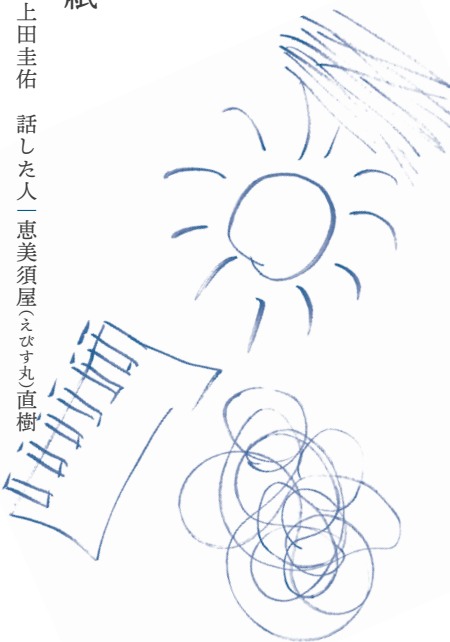
いいものも 悪いものも

自分でルールを作る

そのルールに向かって走れるよう

白紙には戻れないから

遅くない 新しいものを作ろう



## UFO一箱 一〇〇円

詩作 一吉田順貴

話した人 一露野由多加(坂下範征)

眠ざいのんでも寝れない夜は

UFOにお湯をそそぐ……

しかるに俺は歳だから

少しばかりメン残す

残したメンは

「うらめしい」

とくちやくちやのおばけになって、

夢で俺をおどろかす

だけどそれはメンだから

かわいいもので、

こわくない。

「わたし、UFO見たわ」

いつかお前は目をかがやかせ、

来るその日を前にそう言った。

お前は心のキレイな人だったから

特別にむかえが来たのだろう。

ただ、

できれば

老人用の小さなUFOを

作って欲しい……。

## 鳥の行動範囲

詩作 一貝沼航 話した人 一栗本世士

諸行無常の空

親父にぶん殴られて

屋根に登って見上げた空

星のはやさは一光年

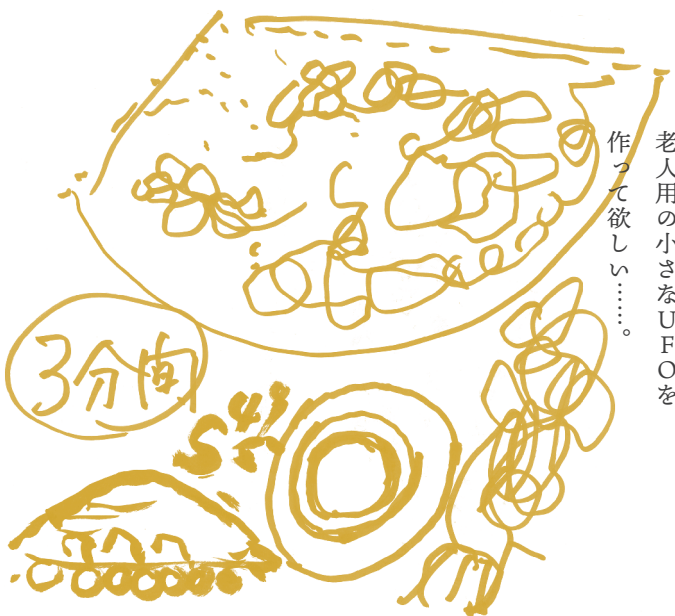
一光年は9兆4600億 km

数えたら

あの星までは18年かかる

一光年は169年かかる

人生なんて針の先ほどのこと



# 天国にちかい

詩作 上田假奈代 話した人 スナフキン

あの日、階段をのぼりきったところが

路面電車の今池駅

南にのびる線路は一直線にせばまり、海にむかう

ふみきりの下は、スーパー玉出の前に

すわりこんでいる人たちがみえる

そのなかのひとりがいかにふりむいて

こつちをみて、するどいいちべつで

空をきる

気づくはずもない視線に気づく

かの男は別の世界からすこしちかづいてきた

今池駅のプラットホームは天国にちかい

まわりにコンクリがたためられ

石がちりばめられている

はじめてそれをみたときは

釜ヶ崎の無縁仏だとおもって

ところで手をあわせた

この日、いっしょにいた人たちが

この石は 侵入しないための、

野宿の人が ねない ための、

排除の石やろな とはなしているのをきいて

くらっとした

阪堺電車の人にきく気にもなれない

排除の石か 供養の石か

石にはやどる

いとうさんの父も祖父も40いくつかで若死に

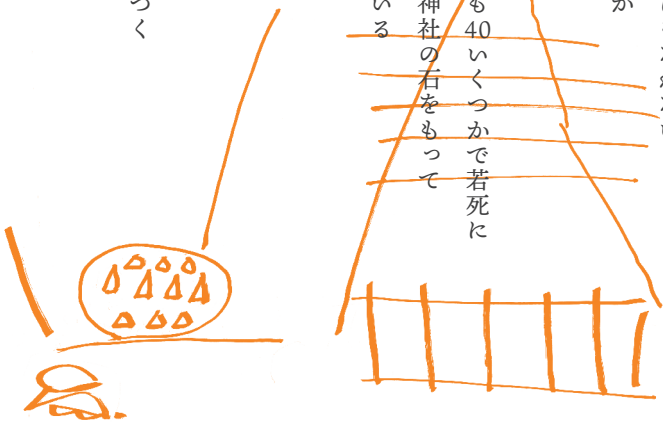
したのは庭にどこかの神社の石をもつて

きたからだと言語人もいる

石にはやどる

石に手をあわせる

石の重さで天国がちかづく



# はくし

詩作 Masaki Ishida 話した人 つじぢら

ちようほうけい

よわい

くしゃくしゃのはくし

よごれた はくし

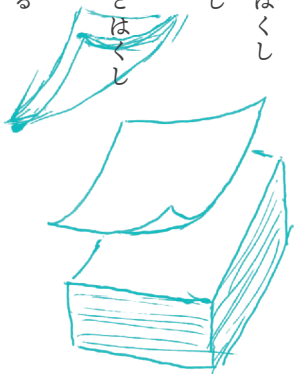
なにもない

はくしは ずっとはくし

でも

はくしは もえる

はくしの かみひこうき



# かんとうだきっていったけど

詩作 しんちゃん 話した人 あくさく・ぺろりん

じゃがいも だいこん

ちくわ ごぼてん

あつあげ がんも はんぺん

みんなだいすき

おかえりなさいのあじ

おでん おでん

かんとうだきっていったけど

いつのまにか

おでん おでん

そろそろ

たべたくなくて

きたなあ





## 花びらを感じる

詩作「上田假奈代 話した人」森本一夫

11月に生まれたときから  
目がみえない  
感じるのは風  
春、花びらが風に舞う  
ちいさなひんやりした鳥の  
羽根のような  
しずかななみだのような  
白っぽいすすくかすかな花びら

生まれは東大阪

近鉄奈良線 若江岩田 わかえいわた

2012年釜ヶ崎にきた

さそわれたら花見にゆく  
住吉大社のカラオケ花見  
花より うた  
みやまひろしの男の流儀  
マイクをにぎる森本さん  
花びらが舞う  
風のなかで 森本さん うたう  
今年も花びらのなかに  
行こう 森本さん

## 汗

詩作「竹ちゃん 話した人」岡村

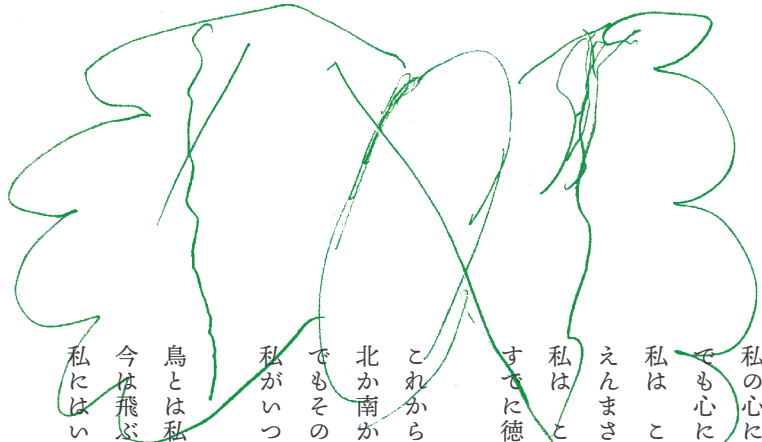
ひとすじ流れる汗  
からだの熱をぶち上げて  
どこからともなく静かにあらわれて  
いっしょけんめいの証明として  
生活をきざむ顔を流れる  
熱から生まれた汗はきれいだ



## 私のつばさは大きく強い

詩作「あささ・ペろりん 話した人」曾我部明宏

私には つばさはないかもしれない。  
私には つばさはあるかもしれない。  
私は鳥でないかもしれない。  
私は鳥であるかもしれない。  
あっ！ じごくのえんまさんが見えた。  
あっ！ 急に消えた。また見えた。また消えた。  
えんまさんなんているわけがない。  
でもえんまさんの言葉が聞こえてきて  
私の心になぜか残る。  
でも心に残っても私に役になんか立つものか！  
私は これから飛ぶんだよ。  
えんまさんの言葉なんか役に立つものか。  
私は これから飛ぶんだよ。  
すでに徳島から大阪へ飛んできたんだし。  
これから私が飛ぶ方向は東か西か  
北か南かわからない。  
でもその土地はストレスもなくて楽しくて  
私がいっつも私らしい所。  
鳥とは私そのもの。  
今は飛ぶ方向は見えていなくても  
私にはいつか飛ぶための翼はきつとある。



## このまちにいるとり

詩作 一八木智大 話した人 垣井しょうゆ

ピピ ピヨピヨ

小さいけど 大人の鳥

大人だけど あんまりなにも考えない

食べるのはその辺にいる虫

あんまり飛ばない

つかれるから

でも本当は飛べる……はず

最近飛ばないからよくわからん

たいていこの辺りにいる

いごちが いい ワハハハハ

いつも笑う

でも他のところにも行ってみたい

でもそれはちょっと勇気がいる

空には大きな鳥もいる

食われるかも

風も強い あぶない

まずはこの街の空へ行こう

空から見ると違って見えるかもしれない

見えないところも見えるだろう

空は広い どこへでも行ける

どこへでも行く



## 年齢のせい

詩作 一高橋亘 話した人 一坂下範征

馬にのって風を切る

アラカン映画館で見ながら

コココーラのビンのふたを空けると

へびがとび出し、体にまきついた。

なつかしいあのコココーラの

びんは思春期の少年に

しょうげきをあたえる。

足あとが点になって飛んできた。

コーラは最近

炭酸がきついから

死ぬ前はやっぱり

麦茶がいいかも。



## ハートの花びら

詩作 一高橋亘 話した人 一金原彰彦

いつも春になると思い出す。

あの小学生が拾った

小犬の「ラブ」。

和歌山の山の中、神社の境内で

走りまわったなつかしい日々。

動物が好きで、人が好きで

家族が好きだった。

釜ヶ崎に拾われたのは

六ヶ月前。

街の人々の「ラブ」に

つまれているのだ。

# 花より男子かんそう文

詩作 一曾我部明宏 話した人 一あ〜さ〜・ペロりん

とりですきやき

ももたろうといえども

とり(ひよこ)を飼いで育てていき

にわとりとなり最後にすき焼き

かわいと言いつつ食べてしまう

人のしんきよう、とても難しい

いぬとりおもしろいのがももたろう

ももたろうといえば人間とのきずな

きずなよりもメイン

なんとといえよう花より男子



## スマートはきらい

詩作 一なかおかずお 話した人 一二文字の人

スマートはきらい。

スマートなんていや。

スマートの基準ってなんなん??

ええようにきこえるけど

それがなんなん。

人は四角形 いろいろ側面がある。

決めつけたらあかんねん。

なんやかんやあってもしろいねん??

一本線のスマートなんてつまらん

わたしをねスマートにさせられるなんて

絶対 無理。むり。抵抗してやる。

わたしは

スマートなんてほんまきらいです。

## 連詩

### びわめき

文末とタイトルをつけた 一江藤まちこ

あかい傘さして

めの前を通りすぎていた

あの人

ふりむきもせず

バスに乗っていった

あの日

最後まで笑顔で

と決めた

のに

最後まで声をかけられず

声にならぬ

声が



傘もささずぼうぜんと

涙を浮かべ見送るのみ

雨しづくが目に入り

涙を隠す・そして酒を呑む

ふと気がつけば聞こえてくる

蛙の合唱とエンジン音

酒瓶を置くバス停に

58k2 (667)

48k2 (207)

連詩

涙

文末とタイトルをつけた一垣井しょうゆ

しとしとサラサラ

若草濡らし

土に染みこむ天の涙

あかいパンダのTシャツの

あかがタンクトップに沁みこんで

タンクトップはピンク色

まざりあったこの色が

心の中をうつしだす

天から降った涙の一滴

心にまじって 海にまじって

地球がまわる

パンダがシャツから飛び出して

くるくる まわるよ いつまでも

そうか 雨は涙なの

お空で泣いているのはだあれ

パンダといっしょに笑っちゃお



連詩

悪いやつ、汝は蚊

文末とタイトルをつけた一赤息

ひさしぶりに降った

止んだら蚊が

出てくるぞ

月も出てくる

今を

待つ

蚊にかまれた

かゆい かゆい

プンプンプン

薄暗い

闇の中

月にすいこまれていく

月に住む

嫦娥(じょうが)の影に

矢を射込む

月の裏には

わたしの思い人がひそんでいる

あいたいなあ

かゆい、またかまれたよ

甘い想いにひたっていたのに

プンプンプン

かゆい かゆい 怒るぜ



# このころのたねとして、 の、であいのたね

うえだ かなよ  
上田 假奈代（詩人）

取材をして詩をつくる「このころのたねとして」（以下、こたね）は、わたし自身の経験から生み出された。わたしが田舎に住み込みで数ヶ月働いたとき、あまり馴染めなくてじぶんから周りの人に子どもの頃の遊びや暮らしについて質問をしてみたら、いつもの表情ではなく親しみのある声で話をしてくれて、少し息が楽になったという経験である。しかし、一方では「聞く」という行為の不躰さや暴力性、立場をどこに置くのか、といった不安や複雑さに億劫になることもある。

多くの人は、詩とはひとりで作るものと思っていらっしゃるだろう。こたねは人に質問をして、聞いたことから詩をつくる他力本願な手法である。ワークショップの形式をとることが多く、作品をつくるよりも前に、息がしやすい場にするためにその場にいる人たちと名前を呼んだり近況報告をしたり、ちょっと体をうごかしてから始める。

詩ができあがると同時に、朗読をしてお互いに聴きあう。すると、出会ったばかりのころと、少し関係性が変わっていることに気づく。気のせいかもしれないが、友達の別の側面を知ったような感覚、あるいはその人の暮らしの道端の草にでもなったような気がする。相手が語らなかつたことを、あえて想像して書いてみる、という大胆な挑戦をするときがある。想像するのではなく、大切な一言が

はつきりと語られた、と捉えて、詩作においてその一言をどう際立たせるかを考えることもある。

ある時、依存症の回復施設で暮らしている元キャバ嬢とこたねをすることになった。一年前までその仕事をしていて彼女に質問すると拒まず話してくれた。憧れの仕事だったこと、スリムな体型を維持し、撮影スタジオでスポットライトをあびたこと。やがて体調を崩していく。彼女の奥の感情はそれほど語られないまま、取材の終了時間が迫る頃、どう思っていたのか、とやんわり質問した。「あの頃のじぶんに、おつかれさまーって言いたい」と彼女は呟いた。

詩作する。詩のことばは淡々と体験を追いかける。呟いたことばを最後に記した。朗読し終わった時、隣の彼女の吐息が聞こえた。ああ、区切りになったのかな、と思った。彼女がじぶんで口にしたことばを再掲しただけなのだが、何重もの声になって、彼女のもとに再び声が帰ってゆく。それは、わたし自身が人生のなかで何かを選択するときの、このころのたねとなって生きていく。



上田假奈代 Ueda Kanayo

「ことばを人生の味方に」と詩にまつわる活動、ワークショップや手法の開発、詩作・朗読など、30年近くつづけている。詩はことばとことば以外のもののできているとよく思う。コロールム代表理事。

# こころのたねとしての匂い

もりた ゆうき  
森田友希

## 西の窓辺

外は雨。ガラスに溜まった雨粒が合わさったり離れたりしながら流れていく。それは街を行き交う人の群れのようで、私もその雑踏に紛れていく。人影が揺れる曇った窓。窓からの眺めは物心がつく頃から変わらないものとして、そこにあり続けた。そんな景色が刻一刻と変わっていくように感じられた瞬間があった。

雪の日の張り詰めた空気

兄が机に向かう後ろ姿、二段ベッドの軋む音：

私は、青い瓦の家で長い間暮らしてきた。

兄と過ごした部屋の中央にはいつしか壁ができ、兄弟それぞれの部屋となった。しばらくして、兄のことがよく分からなくなった。壁の向こうから兄が語りかけてきても無視し、時には罵倒した。兄を狂った人だと思い、蔑んだ。どう向き合っているのかさえ分からなかった私は、十九の時に旅に出た。

## はじまりの街

女が話をしながら赤ん坊に乳をやっている。酒場では男たちが汗の匂いを放ったまま話し込んでいる。子どもが鼻歌のリズムに合わせて通りを歩き、野良犬が牙をむき出して欠伸をしている。初めての旅で訪れた、はじまりの街での光景。

窓の外を旅した時間が部屋の中に雪崩れ込む。雨音は遠ざかり、空を覆う雲に切れ間を見つめる。そこから覗く青さに、空はこども

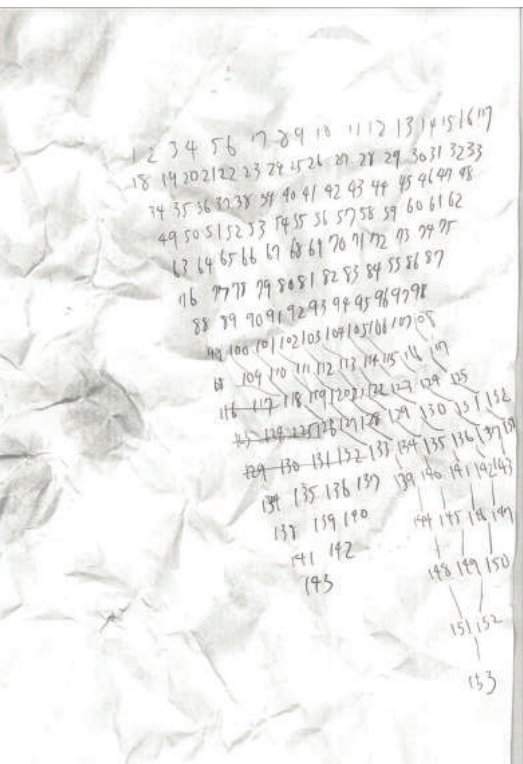
青かったのかと初めて気づかせてくれた街。たしかあの日も雨上がりがだった。

真新しいザックを背負い、通天閣を横目に電車を降り、ガード下の改札を出る。コンクリートに溜まった雨とともにたちのぼる街の匂い。それは花の腐ったような匂いだった。街には、私がそれまで出会うことのなかった人たちがいた。壁を隔てた向こう側の、ただ傍を通り過ぎていくだけだった人たち。

はじまりの街は、それまでの私の言葉を奪っていった。そこで語られる言葉を聞いて、なぜか私は涙し、喜び、時には怒りさえした。街を訪れてからは、まっさらな紙片に何も書けず、軽くつまみとって出来たしわをただ眺めるばかりだった。

## 紙切れ

旅は続き、気づけば私の部屋には、大きさや色も不揃いな紙切れたち、メモや日記、ポ





トレートや遠い国の写真が転がっていた。散らかった記憶の断片が、ふとした瞬間に、つながり始める。



この窓からの眺めを兄はどのように見ているのだろうか。そんなことを思うようになってから兄と少しずつ話すようになった。

私一ねえ、神様のこと考えたら、

飛行機が飛んだの？

兄一うん

私一最近？

兄一三、四日前：

いや、うーん一週間くらい前かな

私一部屋で？

兄一いや、そのー、こう曲がっている道が

あるよね。道の途中で、見たら、

飛行機が飛んで：

そういうのって結構あるんだよね。

私一へえ、他にそういう現象とか起きてるの？

前に鍵を探していき、

廊下に紫の光が落ちているのを見たら、

鍵が見つかった：

それは神とはまた別の話？

兄一神とは別…それは光だね。

兄は街はずれにある病院から脱走したことがあった。病院のすぐ裏の木立を抜け、誰も住んでいない家屋の物陰で息を潜め、気付いた時には家にいたという。私はその抜け落ちた記憶を辿ってみたくなり、兄と一緒に病院の診察へ行ったあと、別れてひとり、病院からの帰路を撮影した。兄の眼をかりると、見慣れたはずの景色が全く異なるものとして立ち現れる。

近ごろ兄は、祖父母の家で暮らすようになったので、空いた部屋は暗室にした。私は兄の眼をかりて、窓からの景色を眺めたあと、雨戸とカーテンを引き、赤いセーフライトを点けて、流れてくるイメージを定着させる。兄の記憶の中を歩くと、普段は見落としてしまっていることに気づかされていく。

ふと、この窓を揺らす風は、はじまりの街でも吹いていたのかもしれないな、と思う。窓をあけ、雲間の青さに見入れば、たねを落としたばかりの花の腐った匂いが漂ってくる。

※これは、統合失調症の兄の眼差しに先に触れようと試みた写真集「OBLIQUE LINES」の制作にあたり、「このころのたねとして」の手法に影響を受け、その関係性について記述した文章である。



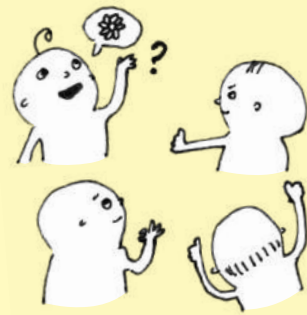
森田友希 Morita Yuki

1989年、埼玉生まれ。大学時代にコラムを訪れ、卒業後、写真家としての活動を始める。主に写真によって自己や他者の記憶のイメージを収集し編集するプロジェクトを行っている。2016年、「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD #5」グランプリ受賞。

# 合作俳句のつくり方

釜芸発!

ひとりに1枚、紙をくばり、  
紙の右側に縦書きで、  
1行5音ほどの文字を書く。  
テーマを聞いて、  
おもいつきで書く。  
(難しい漢字を使ったらルビをふる)



1行目のためのテーマを話し合って決める。



みんなで集まる。ウォーミングアップ。  
(例：呼ばれたい名前を言う、ストレッチする、  
近況報告をする、など)



3

2

1



4

みんなの紙を集め、  
シャッフルする。  
みんなに1枚ずつくばる。  
もし自分の書いたものが届いたら、  
誰かと交換する。

5

手元にとどいた5音の文字をみて、  
2行目・テーマを忘れて、  
7音ほどの文字を真ん中  
に書く。  
なるべく自由に。なるべく遠くに。



8

音読と褒めあう発表会：  
作品を2回音読する。次に読む人を指名する。  
次の人は前の人の作品をとにかく  
褒めてから(批判しない)、音読する。  
最後に発表した人の作品については、  
最初に発表した人が褒める。

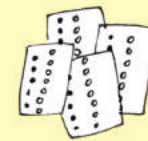
7

紙の左側に、3行目・しめの  
5音ほどの文字を書く。  
もし、左から読んだほうが  
おもしろそう、と思ったら、  
紙の上の方に、  
紙の上の方に、  
左から右への矢印を書く。



6

みんなの紙を集め、シャッフルする。  
みんなに1枚ずつくばる。  
もし自分の書いたものが届いたら、  
誰かと交換する。



用意するもの(人数分)  
・紙(A4のコピー用紙など)  
・ペン(はっきりした色のもの)

俳句でも川柳でもなく、季語もなく、  
ひとりだけでなく、みんなで楽しむ、  
ことばあそび。  
3人以上集まって、5・7・5をつくりま  
す。

釜ヶ崎まちなか合作俳句

完成した合作俳句を  
まちの中に置いてみたよ!



あいりん労働公共職業安定所 ↑

消しカスで  
家と空き部屋  
空茶ゆん

トコゼ行く  
海のなかまで  
お玉のはてまで

黒板と  
キッチン 浜松  
無法松

にぎやかな  
うちゅうはてで  
金魚住む

つみはつこの  
へリコプターの  
羽がない

ちっさい椅子  
私の心は  
裸の玉様

あいりん労働公共職業安定所 ↑



緑色  
黄色あかんな  
バジルの葉

たけやぶを  
ハンペン地獄  
からし雲

のぞきこむ  
宇宙の先に  
迷う我

削すすすむ  
象亀の家  
見つけたリ

太巻の  
葉巻きくわえて  
ねまき着る

無法地帯  
前も分らず  
ゴリラだけ



ははのはは  
わが人生の  
木の芽雨

忘れられ  
まあるいさみどり  
ふくれてる

むらさきの  
星の玉子よ！  
巨人の星

人知れず  
川の流れに  
笑う風

平凡な  
なぞなぞ答える  
春の風

かるすぎ  
地球のうらがわ  
北月の貝がわ



カー

生き抜いて  
先はえぐすりの  
元をとる

0051

追加料金の投入は、  
必ず鍵を差し込んで  
から投入してください

使用期間 3日間  
別途保管 10日間

病院の  
売店のアサリ  
わかめ 顔

0036

点々と  
深くしみ行く  
深く深く

0031

ご使用になるときは  
1. 必ず荷物を入れる  
2. こびねを閉める前  
に料金とコインを  
確認を入れる  
3. 鍵をおかさない  
4. かんまを閉めて  
はいです  
お出しになるときは  
1. 荷物を取り出し、鍵を  
かざして開錠する  
2. 鍵を閉めてお返しする  
3. 鍵を閉めてお返しする  
4. 鍵を閉めてお返しする  
5. 鍵を閉めてお返しする  
6. 鍵を閉めてお返しする  
7. 鍵を閉めてお返しする  
8. 鍵を閉めてお返しする  
9. 鍵を閉めてお返しする  
10. 鍵を閉めてお返しする

0037

コインロッカーご利用  
1. 使用期間  
ご利用から 3日間です。  
2. 期間超過後  
追加料金を投入下さい。  
追加料金の投入が無い場合  
追加料金に保管します。  
3. 保管期間後は廃棄等  
となりますのでご注意ください。  
4. 鍵紛失  
3500円申し受けします。  
お引取りの履歴確認  
5. 連絡先 090-4568  
6. 連絡先 090-4568

0032

追加料金の投入は  
必ず鍵を差し込んで  
から投入してください

使用期間 3日間  
別途保管 10日間

0026

コインロッカーご利用  
1. 使用期間  
ご利用から 3日間です。  
2. 期間超過後  
追加料金を投入下さい。  
追加料金の投入が無い場合  
追加料金に保管します。  
3. 保管期間後は廃棄等  
となりますのでご注意ください。  
4. 鍵紛失  
3500円申し受けします。  
お引取りの履歴確認  
5. 連絡先 090-4568  
6. 連絡先 090-4568

0027

防犯ベル付

空気がよし  
冷たい庫の中  
一人さり

0042

荒井由実  
銀河のかなた  
ソーダ水

0038

じらじらと  
天まで 孤独  
くしをながしゆく

0033

夜半0時を超えるごとに追加料金が  
異なります。小型 100円 中型 200円

100円

0043

夜半0時を超える  
追加料金が  
異なります

100円

0028

0029

0034

0039

0040



回廊の声  
夜間飛行の  
よなが

折々の  
せんなほだ  
みちがえた

しゆたりの  
酔うてまよふ  
湯原の夢

耳もとに  
ぼく者ならち  
ひと雨しなく下

最後の詩  
宇宙で最後の  
しっぽつかんで

さきおいて  
火の粉まみり  
扇がな





# 合作俳句一覽

大岡信追悼句会

2017年4月7日

ささやいて 火の粉まいあがり 扇かな  
しわたりの 酔うてさまよゆ 湯気の夢  
星の声 夜間飛行の よだかより  
最後の詩 宇宙で最後の しっぽつかんで  
耳もとに ばく音ならず ひと雫  
折々の みんな違った みちがえた  
はやおきで 忙がしいのは にわとりで

空の風 ブルーの香り 新学期

ふるるるる 呼び出す音の 悲しげに  
うすぐらい 川に浮かぶは さくらいろ  
空の窓 リ・リオリオリに 陰かれて  
笑うてや そんなんゆうても マスクやし  
ミミズさん 土の中から そつと出る  
橋わたる 川面の桜 春うらら  
鳥の足 焼いて食べたし ビールとね  
カンパ箱 おかしを入れる 阿呆かいな  
雨ふって さくらおちると つぎの恋  
ほしぞらに とどけばいいな 願い事  
子の寝がお 誰と戯る 夢のなか  
春風よ 詠み人知らず シラス食う  
夏の虫 桜のゲジゲジ すべり落ち  
よこ笛で 新しい音 滝つぼで  
春うらら てっぺんとんだ 跳ねる足  
あわあわの ぶくぶくふくらむ しゃぼん玉  
ボクのみち 双六やけど バクチかな

道草の とちゅうのとちゅう 宙がえり

ころころと わらうよな声 あっはっは☆  
闇の声 せみが鳴くのは 酒欲しい  
初もうで 着物がきれいな ニューハーフ  
桜咲く あの人の名前 恋のうた  
さよならを 教えてくれた 月と花  
おじさんが しゃがむ足元 レディーガガ

「教室」

2017年7月12日

ひとのこえ ちかいかとおいか 真ん中か  
ちっさい椅子 我の心は 裸の王様  
ゆうやげが なつかしい人 はしりだす  
黒板に 帰りを待つの 勉強だ  
ごみばこの ヘリコプターの 羽がない  
消しカスで 家と空き部屋 空茶わん  
にぎやかな うちゅうのはてで 金魚住む  
うみの底 いつも考え 地図帳  
黒板と キッチン浜松 無法松  
窓のさん あしたになったら やってくる  
オレンジの 風にまかせる ホームラン  
黒板に ブラジルの音 白昼夢  
黒板消し 明治天皇 消せない歴史  
しゃべり声 あげはの羽に 君がいる  
クーラーの みんなの声が 光ってる  
青春部屋 坂道くだる 腹へった  
島原へ たびにでようと 黒板の

紙ひこうき 飛ばずに燃えて 地へかえる  
トンビ行く 海のなかまで 空のはてまで  
だいきらい 新宿駅が 地下への国で  
窓の外 汗が輝く キックオフ

「ジャングル」

2017年9月19日

まっすぐに ふわふわ生きる まあ、ふつう  
太巻の 葉巻きくわえて ねまき着る  
草しげる 声もとどかぬ 蟻地獄  
緑色 黄色あかな バジルの葉  
前すすむ 象亀の家 見つけたり  
虫だらけ かゆいかゆいと かきむしる  
たけやぶを ハンペン地獄に からし雲  
無法地帯 前も分らず ゴリラだけ  
のぞきこむ 宇宙の先に 迷う我

「骨」

2017年9月19日

工事中 占い大吉 立派に建つ  
日光浴 かんおけのなか 夢をみる  
コツコツと 打ちつけに釘 折れまくり  
綿帽子 限定求め スケルトン  
野球を オリンピックで フンコロガシにするの  
毛糸のような ぼそぼそあるく ダンゴムシ  
焼けた紫 燃えゆく森を 予告している  
骨格に バナナとイチゴ すきとおる  
ふというで おいしいからあげ 家の味  
まっしろい うさぎの毛並み 山脈に似て  
かるくまう いろんな人の くるうぶし

「闘病」

金子兜太先生に捧げる

2018年3月13日

空気よし 冷ぞう庫の中 一人きり  
点々と 深くしみ行く 深く深く  
荒井由実 銀河のかなた ソーダ水  
生き抜いて 毛はえぐすりの 元をとる  
病院の 売店のアサリ わかめ顔  
とつとつと ほおばるおかき 散歩する  
ドリップの 沸きたつ雨音 点滴中  
白い森 静かなウサギ 月の裏  
知らなかった 太陽の真下 君のそば  
じらじらと 天まで孤独 「く」をさがしゆく  
「庭でひとりひとりひろってきたちいさな  
かけらをはじめりに」

2018年3月13日

人知れず 川の流れに 笑う風  
ははのはは わが人生の 木の芽雨  
腰かける 卒業式の 木のてのひら  
底つきタッチ 天まで届く ヨーヨーの  
むらさきの 星の玉子よ！ 巨人の星  
甲子園 庭に日の射す えんがわで  
隠れてた はるか広がる はんたい側  
平凡な などなぞ答える 春の風  
痛くない 火山の炎 集う人  
忘れられ まあるいきみどり ふくれてる  
かるすぎて 地球のうらがわ 背負われて

# 合作俳句の愉悅

にしかわ まさる  
西川勝

釜ヶ崎芸術大学の俳句部から講師を依頼されたとき、ぼくにはまるで自信がなかった。俳句に関心があるといっても、ぼくの場合は自由律俳句というジャンルで、それも尾崎放哉という俳人について少しばかり詳しいだけだったからだ。ええい、ままよと、初回の句会に出てびっくりした。予想外におもしろいのだ。しかも、なにか大切なことを考えさせてくれる予感までするのだ。

合作俳句は句会で生まれる。というより、句会でしか合作俳句は姿を現すことはないのだ。このことが合作俳句を楽しむ上でも、合作俳句の意味を考える上でも要になる。実際に句会に参加してみなければ、身をもって分かることはできない。とにかく三人寄れば、合作俳句をやってみよう。一人ではできない。二人でも無理。けれども三人以上ならば、どうとでも合作俳句は生まれてくる。三人以上の集まりが活動するとき、人間の社会的側面が明確になってくる。合作俳句は社会人の遊びなのだ。このとき、社会人である条件は複数の人と関わりを持つとうとする意志であって、大人であるとか働いて金を儲けているとかは関係ない。どんな立場の人であっても、自ら名乗る俳号でもってお互いが対等の句会参加者となる。

合作俳句に対して「あんなもんは俳句じゃ

ない」と怒りをあらわにする人もいる。俳句とは何なのか、その議論に決着をつけなければ、いつこうに前向きの話にはならぬのだが、俳句の歴史や背景を少しでも学んでみれば、そう簡単に合作俳句を否定することはできない。和歌、連歌、俳諧、発句、俳句という流れのなかで、合作俳句は意外にも連歌や俳諧と同じ「付合（つけあい）」の文芸といえる。近代俳句は作者の個人性を重んずる考えから「付合」を衰えさせた。句会も合評の場ではあっても合作の場ではなくなくなってしまった。また、最近では活字で俳句を発表する場が増えてきたことにより、結社の句誌やインターネットの俳句サイトに、句会を経ることなしに、個人的に発表されることが多くなっており、句会の役割が縮小している。座の文芸としての土壌がやせてきているのだ。



合作俳句の楽しみを説明しようと考えると、ふと思ひ浮かんだことばがある。「因分可説、果分不可説【いんぶんかせつ、かぶんふかせつ】」という仏教のことばだ。どんなふう  
に悟りへと近づくのかは説明できても、悟りとはどんなものかについては説明できないという意味である。この「悟り」を「(合作俳句の)楽しみ」と置き換えることができるかもしれない。合作俳句の方法や工夫する点などは説明できるけれども、その楽しみにについては各人が体得、味得するもので、容易に共通言語化することはできないし、また、するべきでもないだろう。が、「因分可説、果分可説【いんぶんかせつ、かぶんかせつ】」とした空海のように、説明言語ではない詩的(喚起的)表現を試みることは無益ではないはずだ。

合作俳句では、句会において、上の句、中の句、下の句と三つの関わり方を順番に各人が行う。上の句は、自分一人の表現で始まるが、以降の流れに関しては後の二人にお任せするしかない。中の句は、前の句を引き受けながらも、それと同調するのではなく異なる表現を試みる。矛盾を恐れる必要はない。まだ句としては途上にあつて、締めくくりは後続する人に委ねてしまえるからだ。最後の下の句では、上の句と中の句の危ういつながりに、何かを加えることで一挙にまとめあげるという作業を課せられる。三つの関わりは、まるで責任の重さが違うといえる。しかし、句会の参加者が

全員、これらの三つの関わりを担うことで、負担は対等になって偏ることはない。単なる分業や連携プレーではない「流れの共同性」に参与する。通常の社会的組織によくある「固まりの共同性」においては、成員は一定の役割をあてがわれ、その持ち場を離れることは許されない。全体の構成要素として部品化されるか、よくても歯車にされてしまうのだ。

「流れの共同性」の場合、成員は次々と役割を変化させつつも、全体の変化進展の原動力として、他の成員と調和を保ちつつ、それでも独自の働きをする。一人では予想できない、二人で折り合うこともできない、誰もがすべての人と関わり合う変化のただなかにあつて、まだ誰も知らない世界へと一緒に突き進んでいく。そんな興奮に満ちた喜びが合作俳句にはあるのではないだろうか。



西川勝 Nishikawa Masaru  
1957年大阪市生まれ。  
自由律俳句結社「青穂」同人。  
尾崎放哉のファンで、著書に『一人』のうらにー尾崎放哉の島へー(サウダージ・ブックス、2013)がある。

# お互いの暮らし

たかぎ さとし  
高木智志（俳人）

合作俳句は、見ず知らずの人がその場で俳句を分担して作る芸術です。子どもから大人まで、時には外国人も参加して作っています。初めて釜ヶ崎を訪れた人と地元で暮らしているおじさん達の出会いの場所になっています。

俳句部は、作品よりコミュニケーションを大切にしています。だから、一切けなさないことが唯一のルールとなっています。必ず褒めることが約束されているから、初心者でも安心して作ることができます。

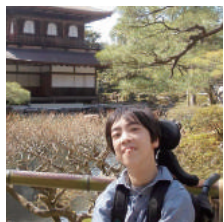
普段、僕は一人で俳句を作っていますが、合作俳句は三人で一つの句を作るので、個人では想像できなかったことでも作れます。三人の言葉の性格の違いで、個性的な俳句になっていきます。最初の五音は決められたテーマで、似通った言葉になってしまうことがあっても、一句が出来上がった時には全然違った俳句になります。それぞれに人生を物語っている言葉が入っていくことが面白いと思います。毎回、集まってくる人は違うので、様々な俳句が生まれていきます。

一人でする俳句は、どうしても自分が伝えたいことだけを大切にしますが、合作俳句は、半分自分で、半分は他者のことを考える必要があります。特に、下五を考えることは至難の業です。一見関係がない言葉の並びに想像を膨らませ、似ている点

に更に発展する言葉を付けると、それぞれの言葉が生きてくると思います。他人が書いた言葉の意味や思いを想像し、自分の思いに向き合いながら言葉を紡ぐ作業をしていきます。前の言葉に自分の思いを融合してゆく感覚があります。



俳句部を始めて、いろんな人と俳句を作って、自分の世界が豊かになったと思います。それも、俳句部の講師に誘ってくれた或るおっちゃんのお陰です。より多くの人が実際に釜ヶ崎に来て合作俳句を作ること、お互いの暮らしが豊かになると思います。何気なく付けた言葉が、自分の気持ちを知るヒントになるかも知れません。毎回、俳句部は笑いが起こって楽しい時間です。



高木智志 Takagi Satoshi  
1995年豊中市生まれ。花園大学社会福祉学部臨床心理学卒業。俳句結社「海程」「海原」会員。公益社団法人日本心理学会会員。認定心理士。脳性まひによる身体障害がある。

## そのたびごとに、

おがわ あゆと  
小川歩人（哲学研究者）

## ちいさなことばと場をつくる

誰かと一緒になにかをつくることは、結構難しい。ほかのひとの表現や思いが自分と噛み合わない、文字通り歯がゆい。その歯がゆさからはじまることもある。でも歯がゆいものは歯がゆい。その点、合作俳句は簡単だ。ただ簡単だけれどもどこか複雑で、参加したひとたちはなんだか不思議な気持ちになる。一通り手順を踏むと、自分のものともほかのひとのものとも言えないような句ができていく。なぜだろう。

普通の俳句は五七五。十七音の定型だ。定型のリズムは日本語によくなじんで創作を後押しする。けれども、合作には本当にいろんなひとがやってくる。普段から表現に慣れているひともしれば、ぱっと十七音くらいと言われて、うっと息がつまるひともある。十七音も長いひとには長い。なので、合作はもっとちいさいところからはじめる。合作でひとりが一度に書き足すのはさらにちいさな五や七くらい。喉につつかえることのないくらいで、さっと押し出してしまえる音。でもわたしはわたしでなくなる手前で協働することはマジックペンや筆で書きつけ、手放し、受けとる。書かれる文字もか細かったり、太かったり、黒だったり、桃色だったり。喉を通らなかつた言外の意味も、耳から目、目から手を通して紙の上で受けとめられる。大勢

の声をいっぺんに聞くのは難しいけれど、紙の上ではばらばらな文字も一緒に並ぶことができる。

書きつけ、手放し、受けとるのリズムのなかで五七五がばらばらになるのと同じくして、参加者は自分の頭もばらばらにする。最初の五音くらいはその場で選んだ主題に触発されることだけ、次の七音くらいは想像力を全力で飛ばすことだけ、最後の五音くらいは句の全体と向き合うことだけを考える。ひとつの句をつくるには実はいろんなことを考える必要があるけれど、あまりにいろいろ考えすぎてもうまくいかない。だから、ことばに向かい合う態度を限定して、短い時間で切り替えていく。すると、こんがらがった頭が順番にはぐれて、句のリズムもできていく（でも別にそうしないひとでもいて、それがまた新しい合作のリズムを生む）。

ひとつひとつのことばや気持ちに集中して区切っていくと、ほどけた句の余白にほかのひとが入り込んでくる。その場の気分も、明日を向いた想像も、何十年も前からつもったことばも、ほの暗い気持ちもある。思いもよらないことばに、げっと驚くこともある（下の句を書くぞと挑んだら、すでに中の句までで十七音が終わっていたときは肝が冷えた）。それらを受けとめたり、ひっくり返し

たりして、意味やらかたぢやらがまとまってくる。

このような手順がうまく機能するためには、同時に表現を受けとめる場をつくることが重要だ。まずはじめのウォーミングアップ。よくあるのは、自分の呼ばれたい名前を俳号として、ほかの参加者に呼んでもらうというもの。今まで呼ばれてきた名前、今日呼ばれてみたかった名前を名乗り「せーの！○○○！」と呼ばれる。少しはにかんで「はい」といったりいわなかったり。おどけてみたりするひともいる。いるはずのなかった名前でもほかのひとから呼びかけられることで本当にそこにいるような気分になる。さらにウォーミングアップが済んだら主題を選ぶ。その日の空気、夏の庭、色に恋に生老病死。最初に呼び呼ばれ、その都度その日の場所と時間が合作の過程に書き込まれていくことで、表現が受けとめられる場が徐々にできてくる。

最後の音読と発表会は、一旦できあがったことばと場に再度向かい合い、それらを開き直す時間だ。ここで、それまでに書かれた句がはじめて声に出して読みあげられる。ぼらぼらの文字がひと息に句として響く。それまで受けとってきたことばをほかのひとたちに宛てて読みあげるとき、これでよかったのかと不安に思うこともある。聴く側もはじめて出会う句にことばが追いつかないこともある。しかし、ここでは否定も当惑もせず全力で褒めることだけに注力しなければならな

い。思いつきでも、まずは発せられたことばを受けとって褒める。そうして、参加者は上中下と三編の句へ散らばりながらほかの誰かと一緒に三回褒められることになる。

ふと、自分が書いた句がおかれた場所にはっとする。それまでの行程ではひとりほかのひとのことばに向き合っていたけれど、発表会では、わたしのものでもほかのひとのものでもあるひとつの句が褒められている。句を介して肯定が共有され、参加者は改めて合作を捉えなおす。呼びかけ、応答する場の共有を繰り返し、句を反芻することで協働の経験が新たに織りなされていくのだ。

合作の時間は短い。一時間足らずのあいだに、いろんなひとたちのことばが組み合わさっていく。ただし、合作俳句はおよそ十七音のひと息をぐっと拡大する。そして、普段なら通り過ぎてしまいそうなちいさな時間の中かに、ことばと場が混ざり合う協働と表現の手がかりがあることを教えてくれる。



小川歩人 Ogawa Ayuto

大阪大学大学院人間科学研究科共生の人間学講座、日本学術振興会特別研究員DC2。三年前、はじめて釜ヶ崎を訪れ、以降釜ヶ崎芸術大学や哲学の会へ度々参加するようになる。専門は現代フランス哲学。

# 釜ヶ崎・妖怪かるたのつくり方

釜ヶ登！

かるたは、「つくろう！」と決心することが大事です。ひとりで作成するのではなく、みんなでつくろうとするときは、「あ〜ん」までの表をつくり、みんなで集まり、ことばをうめていきます。

### 用意するもの

人々が集まり、話し合う機会と場所。試行錯誤できるよう、いくつかの手法。例えば、サウンドスケープ・フィールドワーク、俳句や詩を作る会、日常的に話を聞ける場など。

（コルムは釜ヶ崎で10年余り喫茶店のふりをしていたので、そこで見聞きしたことがかるたの読み札になった）紙、ペン、カメラなど。

### 釜ヶ崎妖怪かるたの考え方

ここでいう妖怪は、キャラクターの妖怪ではありません。人々の生活や仕事、ことばに宿る妖怪を見出しています。釜ヶ崎は人の過去を問わないまちです。過去にながらあっても、なんとか生きていく。このまちの懐のふかさを「ゆるすまち、ゆるされるまち」とらえました。このかるたに関わった人は釜ヶ崎に暮らしてきたわけではありません。多くは外からの来訪者。勝手に釜ヶ崎を妖怪のまちと呼ぶことに抵抗があるのは当然のこと。けれど、変わりゆく釜ヶ崎において、このまちを発見できるのは他者のまなざしでもあります。釜ヶ崎で働き暮らしてきた人たちのおしゃべりのなかの一言を書き留めながら作成しました。

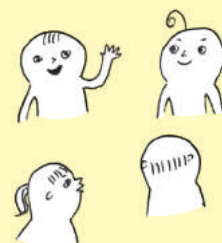
### 釜ヶ崎妖怪かるたの方法

何人かのチームをつくり、サウンドスケープ・フィールドワークに出かけます。妖怪について勉強したところ、「音」との密接な関係を感じたからです。聴こえない音を聴いたり、この場所に立つと何か聴こえそう、というところをみつけます。そのあとみんなで集まって話し、マップに落とし込みます。さらに俳句や詩のかたちでも表してみます。

また釜ヶ崎では独特の用語・隠語があることに着目し、使われている場面をかるたにします。今回は2000年代はじめの釜ヶ崎で使われていた用語を中心としています。作成後、釜ヶ崎をよく知る人に確認しました。絵札については、イラストではなく、写真を採用。この地域の記録にもなりましょう。



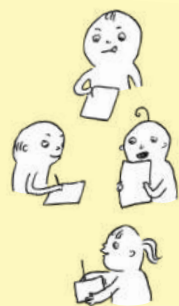
かるた大会を開催。



1 みんなで集まる。ウォーミングアップ。  
(例：呼ばれたい名前を言う、ストレッチする、近況報告をする、など)



2 サウンドスケープ・フィールドワークを行う。



俳句会、詩の会などを行う。



4 試しにつくってみる。



5 方針を決めたら、かるた制作に取り組む。



6 印刷するなら、印刷会社に。あるいは白札にシールを貼るなど、さまざまな方法がある。





き

救急車も  
パトカーも  
サイレン  
鳴らさない、  
あの通りまで

釜ヶ崎ではサイレンを鳴らさない。人が集まっておおごとになるか  
警察では暴動抑止が大きな仕事のようなのだ。

う

うせもつく、  
ときにと  
大泣き。  
一人で暮らす

一人で暮らす。日払いの場で身軽に移動し、本名などを集ら  
ないのが釜のマナーだった。

あ

あいりん  
センターの  
シャッターの音、  
朝5時  
夕6時

あいりん

か

顔付け  
してるから、  
行ったら  
なんとかなる

手気が  
予定。

仕事は信用ということ。顔付けとは、土建業者、手配師が雇い入れするさい、  
顔見知りを優先すること。

く

くいぬきか、  
どうか、  
確かめて  
決めや

飯場の客

くいぬき(喰後)という。喰後でなければ食事代  
が少なれば赤字になることも。

い

今池駅の  
土まんじゅう、  
名もなき者、  
夜をうめく

今池駅は、萩之茶屋商店街から石段を登ったところにある。と  
な駅だ。

え

縁が  
あったのか、  
なかったのか、  
このまちにいる

釜ヶ崎は全国各地から人が流れてくるまちだったが、生活保護で定住する人も  
増えた。近年は旅人も増え、人が流れてくるまちであることは間違いない。

お

おまえ、  
かまきょうか。  
しっとるか。

釜ヶ崎労働組合(釜ヶ崎共闘会議)は1972年結成、75年に解散した。この  
解散後、釜ヶ崎に居残った人、とまらない人もいる。



そ

そんなこと  
ゆうても、  
ゲンキンも  
ない

現金日払いの仕事(ゲンキン)もない時期がある。雇用の調整弁としての奇せ場でもある。ゲンキンは、あいりんセンターに早朝に行っさがす。

せ

整然<sup>せいぜん</sup>とならぶ、  
シエルトアの  
整理券<sup>せいりけん</sup>を  
待つ<sup>まつ</sup>人の  
身代わり<sup>みしろがわり</sup>

の整理券を待つ人の代わりに、毎日ペットボトルや空き  
。夕方5時すぎに整理券が配られる。翌朝5時に退室。

さ

さ<sup>さ</sup>がらば、あばよ。  
夏祭り<sup>なつまつり</sup>と  
越冬<sup>えつとう</sup>で  
あおう

「あばよ」という愛称の男性のように故郷に帰らぬ  
と暮れに釜ヶ崎に帰ってくる。三角公園で

こ

これから  
認定<sup>にんてい</sup>いくねん、  
また  
あとでな

認定とは、日雇い労働保険の失業給付のうけとりのこと。朝あいりん  
でうけとる。

た

たましいが  
帰<sup>かえ</sup>ってくる  
さんかくこうえん、  
三角公園、  
慰霊祭<sup>いれいさい</sup>

労働者は釜ヶ崎に戻る。三角公園での夏祭りの最終日、  
なくなった人の名前が読みあげられ、公園が静寂につつまれる。

け

現場<sup>げんば</sup>のことは  
現場<sup>げんば</sup>で  
知るしか  
ないねん

なんでも、机の上だけではあかんということ。偉子

す

ずっと、  
そこにいる。  
あいりん  
銀行前<sup>ぎんこうまえ</sup>の  
石段<sup>いしだん</sup>のうえに

偽名でも口座が作れたというあいりん銀行(大阪市による労働者のための事業)。  
2012年3月末廃止。扉の前の階段は、座ってごはんを食べるのにちょうどよい。

し

しらんのか。  
あんのこの  
誇り<sup>ほこ</sup>の  
白手帳<sup>しろてちよう</sup>

白手帳(日雇労働被保険者手帳)を  
誇りなのだと思う。



**つ**  
つっぬけの  
土管、  
噂は  
半日でまわる

釜ヶ崎での噂は驚くほどの速さでまわる。SNS並みかもしれない。かつては、悪い現場や業者の話がすぐに伝わったと聞く。

**と**  
とりの跡、  
していいのが、  
してはいけないのが、  
しては  
いけなかったけど  
よくなったのが

おち小便禁止のしるし。男性がおちた場合、女性も小便禁止になる。

**な**  
ななつの心、  
すてもせず、  
拾ったタマシイ。  
引き継いでいく

謎めいたことを言うおっちゃんですれ違う。ある日、道端で倒れていた人に声をかけると「地球の引力や!」と答えた。

**て**  
てもと  
するのモ  
一苦労

てもと(作業がはかどるための補助作業)するにも相性はナシ。でも、作業をすることが多いが、不器用な人、とよくいわれる。

**に**  
にげや、  
けたおちのどこ、  
長いことおったら  
あかん

「けたおち」とはよくない仕事、転用して中途半端や悪状況なことをさす。上にも3年というけれど、心身の安全のためにも早く逃げることを勧める。

**ぬ**  
ぬい物の  
カゴもって、  
つくろって  
くれる人がいる

つくろった台車を押して、ボランティアでぬい物をしてくれる女性がいる。

**ち**  
地図にないまち  
釜ヶ崎。  
ゆるすまち、  
ゆるされるまち

釜ヶ崎は通称名。1922年に地図から消えた。国の経済成長を支える寄せ場となつたまちには、さまざまな素性や事情を持つ人たちが生きるための寛容さがある。

**ね**  
ねこづかの横、  
電車  
はしっててん

地下鉄が整ったため1993年に廃線になった南海電鉄・天王寺支線。ねこづかには三味線の原料になっていた猫の供養のために立てられた。祭神は松尾大進。



ひ



の



は



ろ



ま



ふ



み



ほ

は

はぬけ妖怪、  
炊き出しの  
味しない

自由律俳句。歯磨きの習慣のない人も多い。歯をくいしばる仕事を  
て、歯が抜けている人がとても多い。

の

のみ、ダニ、しらみ、  
ナンキン虫、  
ああ、  
釜ヶ崎の夏

夏になると、かゆくするのは蚊だけではない。

ま

まほうつかいか、  
鳩をあやつる  
おっちゃん

肩や頭に  
つぎへと鳩を呼ぶおっちゃんがいた。

へ

へびの棲む木、  
しょんべん  
ガードの  
ニセアカシア、  
今日もくぐる

界電車の高架下。そばに公衆便所があるため、しょんべんガードと呼ばれる。  
アカシアの木は白蛇が棲むからと伏探を引きうける業者がいなかったと聞く。

ほ

ほんまやわ、  
博士！  
人生泣き笑い

アルミ缶を使って独自の手法でからくり人形をつく  
笑い」は彼の傑作のひとつ、ビールを飲み終

み

みめうるわしく、  
スナックで、  
とっくりもちつつ、  
入れ歯をはずす

歯抜け妖怪が街に出て、楽しんでいるある夜の様子。生活保護や年金支給日の  
直後はカラオケ居酒屋大繁盛。

ふ

ふくろラーメン  
ひとつ、  
ふるさとの  
家にいく

メーカーのふくろ麺は30~40円。三角公園そばのキリスト教会・ふるさと  
の家一階のラーメン店で調理ができる。

ひ

ひとの世では、  
しのぎ、しけはり。  
あの世では、  
演歌歌手

歌好きの人も多い。「しのぎ」は路上強盗、「しけはり」は博打場の見張り役(白  
当13000円)のこと。しけはり組合は2015年くらいに解散したらしい。





め

めがないのは、  
ホルモン、  
どらやき、  
酒・・・

めからも好きという人もいる。ホルモンは牛・豚などの  
肉が、釜ヶ崎はホルモンの店が多い。

や

やってられへんわ、  
とんこや。  
とことん  
とんこや

「とんこ」は工事現場や飯場などから逃げること。がんばりすぎない、というの  
も大事。

も

もりを  
動かすのは、  
釜のおっちゃん

釜ヶ崎に森はない。けれど全国の道やトンネル、ダム、建物などを

ら

ラジオ。  
道端で  
懐かしい人の  
声がきこえた

ラジオをシャツのポケットや自転車のカゴにのせている  
は2006年の釜ヶ崎のコインランドリー。洗剤キー

よ

よう、耳  
すましてみ。  
きこえへんか。  
汽笛の音も  
誰かを呼ぶ声も

夜遅く、大阪港あたりのフェリーの汽笛の音が風によって聞こえる。

む

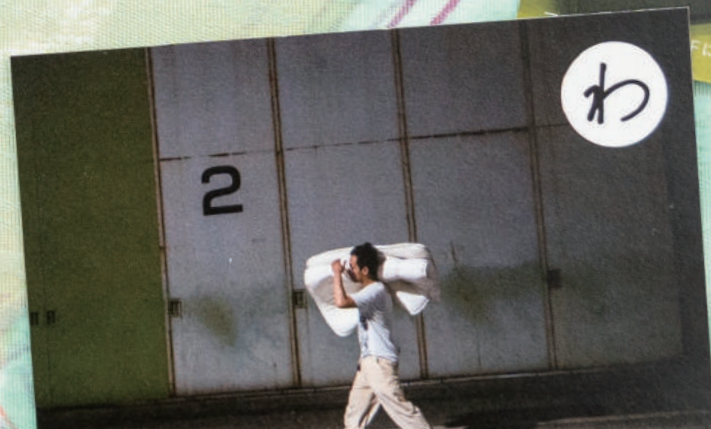
むっかしいわあ。  
あごたたかんと  
仕事せえ、  
言われても

「あごたたく」とは喋ってばかりのこと。無口な人は無口だし、よく喋る人は  
ほんまによく喋る。

ゆ

ユーホーは  
一人乗りで。  
3分  
待ってからね

釜ヶ崎で暮らす坂下さんは、「焼きそばUFOの老人用ミニサイズがほしい」と言う。



ろ  
ロマノフ  
王朝のお話  
ばかりする  
おっちゃん

おっちゃん。いつもロマノフ王朝、ニコライ2世

を  
夢を  
みたのは  
遠い日や

若い頃のことか。

ん  
ん、とかんで、  
歯かけてん。  
道路に  
埋まってるわ

力仕事でかんで歯をすり減らす労働者。歯が悪くなる人がおおい。

る  
るすや、  
ずっと  
留守や

居留守を決めこんだ人。借金とりと借金する人がいて、どちらもの人もいて。死んだことになっている人もいる。

れ  
レコード  
集める人  
おおいねん

ドヤの天井までレコードで埋めていた人、やたらレコードを持って来てくれる人もいた。マンションの共有スペースをカフェにしてレコードが置いてある。

り  
りっしん偏に  
青やろ、  
このまち

盛ヶ崎人情。ここは天国盛ヶ崎。

わ  
ワンカップやろ、  
あぶれたんや  
あおかんや

仕事につけなかつた人

# 声と手が結ばれる

うえだ かなよ  
上田 假奈代 (詩人)

これほど、誰にでも音読されることを前提にした紙製品はないかもしれない。かるた。誰かが声にだして読み、誰かが手をのばす。一枚の紙片と手が結ばれる。

かるたの場を、「座」と呼んでもよいのではないか。大岡信が座を日本独特の文芸形式とし「孤独を自覚する者同士が、日常性とは別次元の関係でつながり、生きる楽しみを共にする」と記している。長年、コールドームではわりと頻繁に「かるた会」がひらかれる。

ある日、コールドームでわたしの娘(八歳)がかるた会を呼びかけた。娘は耳の聞こえない齋藤陽道さんを誘った。さて、どうやって、かるたを成立させるか。娘はおおいそぎで、白い紙に「あ」から「ん」を書き、はさみで切り取り、あいうえお順に並べた。かるたの横に、小さなかるたが並ぶ。読み手は声をだしながら、片方の手で紙片を指さす。すると、齋藤さんは、その字を手がかりに絵札をさがす。

わたしの仕事のひとつは表現のワークショップを企画したり、進行することである。どうやったら気軽に参加してもらえるかに苦労する。いきなり知らない人といっしょに表現するなんて嫌やわと思うのもよくわかる。

ワークショップと名づけけない「かるた会」は、比較的安心な場だと思う。はじめての人にも、「まあどうぞ」と誘いやすいし、時間も短いの

で、見知らぬ人といっしょでも参加してくれる人は多い。

かるた会では、札をとりたくてもとれない、という状況が起こる。コールドームでみると、もし、一枚もとれない人がいたら、その人がとれるよう、まわりの人は手をだすのを控える瞬間がうかがえる。あるいは、とれたときに、まわりの人は拍手して我が事のように喜んでいる。

幼い頃に好きなことば遊びがあった。「〜が〜で〜を〜のように〜した」。〜の部分それぞれ小さな紙に一枚ずつ書いて、集めて、ラダムに出していく遊びだ。例えば「チンパンジーが、観覧車で、宿題を、嘘のように、スマッシュした」といった具合だ。そこにいる人数分の主語や形容詞などをつくって遊ぶ。その場にいる人と笑い転げた。

場のなかでお互いの存在が共有されていくと、声の音色はあざやかになり、からだまで暖かくなる。大岡のことばを噛みしめる。孤独を自覚する者として生きる。この場かぎりのであいのなかで、つながり、生きる楽しみを共にする時間を大切にしたい。

上田假奈代 Ueda Kanayo プロフィール 21 ページ





## 釜ヶ崎で誰かと、うたをつくる



「うたは、たましいで歌う。」

これは、釜芸の合唱部に参加した人の感想だ。

釜ヶ崎では音痴な人も名調子で歌う。若い頃、歌手になりたくて家出した人もいる。よぼよぼと歩いてマイクを持つと、いきなり大きな声で歌いだす。演歌がおおい。戦後の昭和のうたを歌う人たちがおおぜい暮らすまちだ。

音楽を生業とする人たちが芸能界だけでなく活動するようになった。イギリスのストリートワイズ・オペラは二〇〇二年に始動した。ホームレスセンターでオペラ歌手とホームレスがワークショップを継続的に行い、オペラハウスなどで発表する。二〇〇八年、ブリティッシュ・カウンシルがイギリスにおける社会アート活動を訪ねる視察団を組み、わたしは彼らと出会う。そして、翌年、彼らが来日し、このまちで暮らすおじさんたちといっしょにうたをつくった。それが「ふるさとのうた」だ。

事前にわたしが歌詞を作り、ローマ字表記にした。二日間合計四時間で、作曲家のドムさんとおじさんたちは作曲し振り付けをつくった。歌詞を数言、読み上げる。すると誰かが節をつけて歌う。ドムさんは鍵盤を鳴らし、採譜する。どこにもないうたが仕上がっていく。野村誠さんの手法も同様だ。場にい

る人が歌い、ピアノで支え、採譜していく。

以降の作曲は、野村さんと取り組んだ。「あなた」は、参加者が口々に「あ」から始まることばをたくさんあげる。その後、歌詞になるようにつなぎ、節をつけて誰かが歌い、野村さんがピアノを鳴らす。

「釜ヶ崎オ！ペラのテーマ」「ふんが行進曲」は、釜芸の詩の一講座でつくられた詩のことばだけを用いて、わたしが編集した。歌詞先行のため、メロディにあわないときは、その場で詩のなかからことばをみつけた。

「あたらしいうた」は手法が違う。あらかじめ、釜芸の詩や合作俳句の講座のことばをわたしが編集したのは以前と同じ。カットされることをみこして、長めに作っておいた。野村さんが提案した作曲法は、ふたり一組になり、一行づつふたりで話し合っ節をつける。それを順番に披露し、野村さんが鍵盤で支え採譜する。前後のことば、なにも考えずに作った。けれど何度も最初から通して歌うことで微妙な微調整が無意識に行われ、曲になってしまう。その日、俳優の倉品淳子さんの小芝居も楽しく、講座の時間がなくなってしまう。すると、その残りの歌詞はひとりづつ順番に即興で歌うことにしよう、野村さんが言う。こうして、いつも新しいうたが出来上がった。

上田假奈代



# 釜ヶ崎オ！ペラのテーマ

作詞…2014年10月25日の釜芸・連詩の講座のことばから編集…上田假奈代  
作曲…2014年10月30日の釜芸・即興オ！ペラ即興オ！ケストラ参加者と野村誠

ばびぶべぼっぼっぼ

おっぺけほっぺっぺ

ばびぶべぼっぼっぼ

おっぺけほっぺっぺ

ばびぶべぼっぼっぼ

おっぺけほっぺっぺ

ばびぶべぼっぼっぼ

おっぺけほっぺっぺ

おならは星<sup>ほし</sup>のラッパだよ

わたしがうたうと

みんながうたう

おならは星<sup>ほし</sup>のながればし

カバの子ココバ かまオペラ

ココバのおやおやばかオペラ

オペーラペラペラ！かまがさき

オペーラペラペラ！かまがさき

## 釜ヶ崎オ！ペラのテーマ

Voice

♩=120

ばびぶべぼっぼっぼ おっぺけほっぺっぺ ばびぶべぼっぼっぼ

おっぺけほっぺっぺ おならは星<sup>ほし</sup>のラッパだよ わたしがうたうと

みんながうたう オペラペラペラ かまがさき

ばびぶべぼっぼっぼ おっぺけほっぺっぺ ばびぶべぼっぼっぼ

おっぺけほっぺっぺ おならは星<sup>ほし</sup>のながればし カバのココバ

かまオペラ コカバのおやおやばかオペラ

オペラペラペラ かまがさき

伴奏付きの楽譜は、

ココルーム 楽譜 🔍

# ふんが行進曲

## みんなの探検の詩

Voice  
♩=132

みんなのみんなの うらやまに わけいって  
ききゅうにのつて とんでみたい いえでして

あるくあるく あるきまわるのー  
かぜにのつて どこまでもーー

さあー きのぼり わたし  
さあー みえたぞ カエル  
さあー かえろ うどろんこ

はの ター ゼン ふんが ふんが ふんがー ふんが  
の 方 マ

やまは いのししー くまに マントヒヒ かわは どじよ

う あゆに てなが エビー はし

をー わたって ゆうやけ いろの おかあさん

# ふんが行進曲 くみんなの探検の詩

うた

作詞…2014年8月23日の釜芸・「探検」をテーマにした詩のなかから編集…上田假奈代  
作曲…2014年10月16日の釜芸・即興オ！ペラ即興オ！ケストラ参加者と野村誠

みんなのみんなの 裏山に分け入って  
山は いのしし、クマに、マントヒヒ

歩く歩く 歩き回るの  
川は どじよう、あゆに、手長エビ

さあ木登り わたしはターザン

ふんが ふんが ふんが ふんが  
橋を渡って 夕焼け色の 「おかあさん！」

さあ 帰ろう

気球にのつて とんでみたい 家出して  
どろんこのまま

風にのつて どこまでも  
ふんが ふんが ふんが ふんが

さあ見えたぞ カエルとカメ

ふんが ふんが ふんが ふんが

伴奏付きの楽譜は、

ココルーム 楽譜



Song of Home- dedicated to Fuki- san

Words by Kanayo Ueda  
Music by Dominic Harlan, Musubi

*p*

Ka ka ka Fu ru sa to wa a no ya ma

*mf*

Ka ka ka Fu ru sa to wa a no ya ma. Ha ta ra i te Ha ta ra i te

*p*

a ru i te ki ta yo. Ki ga tsu ke ba, ki ga tsu ke ba ko no mi chi mo

*ff*

na tsu ka shi i mi chi I tsu ka kae rou fu ru sa to e I tsu ka kae rou

1st time----- 2nd time-----

fu ru sa to e Ka Ka Ka Ka Ka Ka

*dim*

Ka Ka Ka Ka

Dominic Harlan copyright, April 2009

ふるさとのおたゝ婦木さんに捧ぐ

作詞：上田假奈代

作曲：2009年8月29日・30日

ドミニク・ハーラン(ストリートワイズ・オペラ)と紙芝居劇むすび

かあ かあ かあ ふるさとはあの山  
かあ かあ かあ ふるさとはあの山

はたらいて はたらいて あるいてきたよ

気がつけば 気がつけば

この道も なつかしい道

いつか帰ろう ふるさとへ

いつか帰ろう ふるさとへ

かあ かあ かあ

伴奏付きの楽譜は、

ココルーム 楽譜

# あなた

作詞・作曲…2012年1月10日 釜芸・音楽の講座の参加者と野村誠

あなたとふたり 明日にむかって歩く  
あなたとふたり アラビアの朝焼け  
ああ よかった  
AH あんパン あきらめない  
青い空 青い空 あの時から歩く  
あほんだら

あなたとふたり 甘えていいよ あかんぼう  
あなたとふたり アカシアの雨の日  
ああ よかった  
AH 会いたい あの星のもと  
編み物を 編み物を 赤信号 歩く  
ありんこ

## あなた



1、あなたとふたり あすにむかってあるく  
2、あなたとふたり あまえていいよあかんぼう



あなたとふたり アラビアのあさやけ ああ よかった  
あなたとふたり アカシアのあめのひ ああ よかった



AH あんパン あきらめない あおいそらを  
AH あいたい あのほしのもと あみものを



あおいそらを あのかしんごう あるく  
あみものを あかしのう あるく



あほんだらー  
ありんこー

伴奏付きの楽譜は、

ココルーム 楽譜 🔍

# あたらしいうた

作詞…釜芸の詩、合作俳句の講座のことばから編集…上田假奈代

作曲…2017年12月12日・14日の

釜芸・冬の大三角形歌曲づくりと

芝居参加者と野村誠

天からふった  
なみだの一滴  
ここにまじって  
うみにまじって  
地球がまわる  
パンダがシャツからとびだして  
まわるまわるよ くるくるくるくる


★

雨に歌う  
雨を歌う  
道頓堀の雨に  
わかれ大阪は  
今日も雨  
ひとよひとよと街をぬけ  
みえてくるのは 通天閣  
人という字に似ているな  
人のこころ変わらぬ釜ヶ崎

【 以下は、でたために節をつけて じゅんばんにうたう。 最後にもういちど 上記★のうたをうたう 】

あぜ道にこおろぎと自転車  
虹の橋を渡る 月もでてくる  
三連続ホームラン UFOも飛ぶ  
気がつけば 青空  
たくさんのともだち うかんてる  
にぎやかな うちゅうのはてで 金魚住む  
ごみばこの ヘリコプターの 羽がない  
日光浴 かんおけのなか 夢をみる  
骨格に バナナとイチゴ すきとおる  
毛糸のような ぼそぼそあるく ダンゴムシ  
たけやぶを ハンペン地獄に からし雲  
前すすむ 象亀の家 見つけたり  
ぱしゅん ぱしゅん  
ぱち ぱち おくら  
あした あさ いつもの時間に  
釜のつちのにおい  
つぎたされていくわたしの色  
くしゃくしゃのはくし  
よごれたはくし  
はくしはずつとはくし  
はくしはもえる  
はくしのかみひこうき  
おそくない  
あたらしいものをつくろう  
あたらしいうたをつくろう  
★くり返し

伴奏付きの楽譜は、

ココルーム 楽譜 

「あたらしいうた」は歌い方が難しいので、詳しく知りたい方はココルームまでお電話ください。  
ゲストハウスとカフェと庭 ココルーム | TEL : 06-6636-1612 MAIL : info@cocoroom.org

## あたらしいうた

♩ = 120

うた



てんからふった なみだの一滴  
あーめにうたう あーめをいっとう とうとんぼりの

Piano

♩ = 120

6



まじって うみにまじって ちぎゅうがまわる  
あめに わかれおおきかは きょうもあめ

10



パンダがよ シャビイ ツカヨビ ちとに びちて だをい しぬる てけな  
びと びと



まみひ わえと るての まくこ わるこ るのろ よはか くつわ るうら くてぬ るんか くるかま ーが ーが くるき

Meno mosso

♩ = 92

# 合唱部によせて

たかはし わたる  
高橋 亘 (コキルームスタッフ)

太陽が西に傾く夕方五時過ぎ、あいりんセンター西側ではシエルの整理券が配り始められる。大きな荷物とベッド番号が書かれた小さな紙を持った男たちと一緒に赤い門をくぐり「禁酒の館」に入る。手にはその日の合唱の練習で使う電子ピアノとずっしり重い楽譜。「こんにちは、コキルームです。合唱部でお世話になります」。禁酒の館入り口で係の人にあいさつをする。

ここは日中居場所として釜ヶ崎のおっちゃんたちがシャワーを浴びたりご飯を食べたり、休憩場所として無料で利用する。二階で毎月始めに釜ヶ崎芸術大学合唱部の練習が行われる。たまに、そこにいるおっちゃんに「合唱やるんでよかったですら参加してくださいね」と言ってみる。もしかしたら夏まつりや年末年始の越冬闘争で合唱部の歌を耳にしたかもしれない。おっちゃんたちに歌声はどんな風に届いているのだろうか、にわか部員も含め部員たちはどうだろう。三角公園ステージには、ふだんの練習の三倍以上の人がいる。

毎月の合唱部に欠かさず来てくれているMさんは幼い頃から目がほとんど見えない。手を引きながら練習会場に向かう道、合唱部について聞いてみた。三年ほど前から参加する彼は、釜芸オリジナル曲をみんなの歌声を何度も何度も聴いて覚えたそう。やっぱり、歌が面白いよね」と笑みを浮かべて言った。(歌

詞には熊にマントヒヒ、手長海老なども登場する。)

日々いろいろなことが起こるコキルームで忘れられない夜がある。Tさんはいつも物静かで優しい笑顔を持っている。でも、譲れない何かがあり、それがこの街で彼がひとりで生きる理由なのだろうと思っていた。いつも律儀で遠慮をみせる彼をなんとか誘って合唱部に行ったことがあった。練習中、彼が声を出していたのか、歌っていたのかはわからない。みんなが歌っているから、彼もそこにいることができる空間があったのかもしれない。

歌は下手でいい。大声で歌おう。小さな声でも、立っているだけでもいい。釜芸・合唱部は指揮者を見ない。本番では、指揮者が「ピアノ演奏者に指揮棒が見えないから、みんな、そんなに前に来ないで」と頼んでいる姿を何か見た。不ぞろいのハーモニーが合わさって、お腹から声と笑いが湧き出てくる。からだの芯からじんじんと湧いてくる力。ぴよんぴよんと跳ねる体と歌声。じっさいはそんなに軽やかな体ではないけれど。



高橋 亘 Takahashi Wataru

1992年東京生まれ。小説家ジャック・ケルアックの『オン・ザ・ロード』を読み東京を飛び出す。2017年4月よりコキルームで働きながら日々の出逢いや想いを文章にする。多様な人生がある釜ヶ崎に魅力を感じ続けている。

あとがき

## ひきあう孤独の引力のあいだで

また季節が変わる。

歳をとり、

成長する、とも

老いてゆく、とも言える

のこりの人生の時間がすぎてゆく。

行ったら、登山がうまくて下山してしまっ

た、と話してくれたことがあった」とお坊

さんが話していた。

昨日、釜ヶ崎芸術大学「男女と色恋」の

講座があり、山田創平先生がハンナ・ア

レントのことばを紹介してくれた。

もう十年のつきあいになるIさんは、

よく電車に乗っているためか、遅延する

電車によく乗っていて、その情報をいつ

も電話してくる。いつも「怒ってる？」と

聞く。それが挨拶だ。

宇宙は今後、一四〇〇億年間は存在す

るらしい、と新聞で読んだ。

一昨日、二ヶ月あまり行方不明だった

清掃係の若者がとつぜん現れた。陽に焼

けて、ふた回りほど痩せていた。

若者に「生きててよかった」と、言った。

コルルームで働きたいか、と尋ねると、

うなづく。代わりの人に来てもらって

るので、「前のように毎日は難しいけど、

週二回来て」と告げ、自転車を見おくった。

同じ日、釜ヶ崎で行われたお葬式で、

「Hさんは死のうと思って、大台ヶ原に

物事をつきつめると、だいたい二つの

答えになる。どちらとも決めず、その中間

状態に耐えよ。

釜ヶ崎で暮らすようになって、死につ

いて考えることが多くなった。

縁のきれた人の死は、その死に黄色い

テープが数時間貼られるだけのようない

気がする。

釜ヶ崎では、孤独を生きるから、じぶ

んの孤独とひきあう力が働くときがある。

そんな時に、真剣なことばが挟まれて

くる。

黄色いテープは、本のしおりのように

風に運ばれてくる。

この本と同時並行で、「釜ヶ崎・妖怪か

るた〜ゆるすまち、ゆるされるまち」を制

作している。読み札は釜芸在校生と上田

## 真剣なことば Earnest Words

釜ヶ崎芸術大学 Kamagasaki University of Arts

2019年 3月 31日

編集 | 上田假奈代、冠野文、社納葉子

デザイン | 太田景子 題字写真 | 齋藤陽道

写真 | 齋藤陽道 (P1・2・12・69・82)、松見拓也 (P39-50・52)、  
若原瑞昌 (P25-30)、矢野大輔 (P53)、ココルーム

発行 | 特定非営利活動法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム)  
557-0002 大阪市西成区太子2-3-3 ココルーム 電話 | 06-6636-1612  
Non-Profit Organization  
The Room for Fullness of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)  
2-3-3 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, Japan 557-0002  
info@cocoroom.org www.cocoroom.org

印刷 | プリントバック

助成 | 損保ジャパン日本興亜福祉財団、公益財団法人大阪コミュニティ財団、  
公益財団法人キリン福祉財団、大阪市

活動の寄付を募っています We welcome and encourage donations for our activities.

- ◆ 三井住友銀行 | 天王寺駅前支店 普通 1585265 名義：特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋
- ◆ りそな銀行 | 萩之茶屋支店 普通 0200091 名義：特定非営利活動法人 こえとことばとこころの部屋
- ◆ 郵便振替 (ゆうちょ銀行からのお振り込み) | 記号 01090-5-48059 名義：ココルーム
- ◆ クレジットカードはこちらから … <https://syncable.biz/associate/cocoroom/>

二〇一八年冬 上田假奈代

假奈代が担当。絵札は齋藤陽道さん、松見拓也さん、若原瑞昌さんたちがとらえる釜ヶ崎の写真。ぜひ、かるたも楽しんでください。

この本に協力してくださった原稿執筆者のみなさん、イラストを描いてくれたベティ、写真を快く提供してくれた矢野大輔さん、編集チームの冠野文さん、社納葉子さん、デザイナーの太田景子さん、釜芸のあまぷーチーム、ココルームのスタッフ、ココルームを応援してくれるみなさんに感謝をこめて、筆をおきます。



# 大阪の文化再生を考える 中

詩人、NPO法人こえとことばとこころの部屋代表 上田 假奈代

## 町を知り、地に足を着け

私は、大阪市の文化政策の落とし子のような身である。2008年から、日雇い労働者のまちとして知られる釜ヶ崎(あいらん地区)を拠点に活動してきたが、始まりは市の文化振興事業だった。

「新世界アーツパーク事業」。浪速区にあった旧フェスティバルゲートの空き区画にアートNPOを誘致し、02年度から10年計画で現代芸術の拠点形成を目指したものだ。詩人

として新しい拠点を求めていた私は、最後発として翌年に参加。「こえとことばとこころの部屋」コールドームを開設した。アート好きの人以外にも集まってほしいから、喫茶店を拠点にした。会話に耳を傾けたところ、若い人たち仕事や人間関係に悩みを抱えていて、語り合う場をいつか。表現とは、誰かと語り、応答することではないか、生きるための基本になる

はずだと考えたのだ。しかし、事業はわずか3年で終息、市から退去を迫られた。私は「なぜここで活動を続けたのか」と自問を続けた。

その時に感じたのは、この地域が大阪の近代化の過程で、さまざまなゆがみを繰り返すように積み残してきたところだ。新世界で若者の生きづらさに直面したと同時に、隣町であった釜ヶ崎の状況——近代化を支

えた労働者の高齢化が進み、失業、ホームレス、生活保護を受ける人が増え始めた現実も気になっていた。保護を受けて豊の上で暮らすだけでは不十分、生きていくのが楽しいと思える、「であいつながら」を持つことが必要だと考えた。そこで聞く「こえ」を手がかりに、釜ヶ崎の商店街で次の一歩を踏み出した。



「ヨコハマトリエンナーレ」での「釜ヶ崎芸術大学」の展示風景。「であいつながら」を掲げさせる「インスタレーション」にて、参加者の絵画が展示された「横浜美術館」2014年 岸野子撮影



うえだ・かなよ 1969年生まれ。2003年にコールドームを開設。さまざまなワークショップを企画・展開してきた。14年、釜ヶ崎芸術大学として国際美術展「ヨコハマトリエンナーレ」に参加。14年度の芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。

現在は、地域のさまざまな施設を会場に釜ヶ崎芸術大学と銘打った無料のワークショップを開設し、心に秘めた思いを言葉や絵画、身体で表現し、あいつながらの場をいつか。そのほかにも、地域の清掃活動や祭りの時の助っ人手配、マンション管理を通じた見守り活動など、さまざまな「こえ」を実践してきた。西成区が13年度から、65歳以上の生活保護受給者の社会的つながり事業を始めた。私たちが先んじて展開してきた活動と重なり、プログラムの一部を受託しているが、悩ましいことがある。昨今よく取り上げられる「評価」についての問題だ。



釜ヶ崎芸術大学の作品がずらりと並ぶ＝静岡県三島市

## 釜ヶ崎発 パワフルに

### 日雇い労働者ら

静岡県三島市の大岡信(ことば館)で開かれている「釜芸がやってきた! 釜ヶ崎芸術大学・わしが美なんか語ってもええんか?」展(4月16日まで)には、大阪市の日雇い労働者たちの絵画や書が並ぶ。

い労働者をはじめ、子どもや若者、住民たちも参加してきた。今回は、そうした活動で生まれた人物画や木版画などがずらり。スーパリーのチラシで作った通天閣や円空仏を思わせる仏像、「無理せず生きたい」と記した書などもある。巧拙はあれど、ものを作る「生」な意欲にあふれた作品群だ。岩本圭司・館長は「上手に描こうとしないのに、パワーがある。全部のポスターをはずし、芸術に風穴をあければ、社会は変わるかもしれない」と話している。

(編集委員・大西若人)

2017年02月21日 朝日新聞 ▶  
2015年10月22日 毎日新聞 ▼



成果や効果を数字で示して、と書かれるが、アートなど表現活動は、数字にならない世界だ。なにより、大阪の文化は多様こそが特徴。画一的な評価、支援制度を講じてもその魅力は半減する。一方、アートNPOの側も「口をださないで」という態度をとるべきではない。行政との関わりや社会とのありように興味を持つことで、表現の持つちからが他者とともにダイナミックに展開するチャンスなのだから。私たちが納税者として、お金の使途を主体的に考え、提案していきたい。

「審」し子の立場で今後の大阪の文化を考えると、私は大阪アーツカウンスルに期待したい。首長が変わっても芸術文化の振興策を担う機関となるためには、その基盤の拡大・強化が重要だ。そして、各団体の新規事業に補助金を回すだけではなく、調査をもとに基盤強化に重点を置くことが、事業の広がり、雇用増大などの効果をもたらすはずだ。

「釜芸」のプログラムは、あるおじさんが「アルコール依存症の人々の酒は薬をやめらんやない、人と会つこと生きることが楽しいと思わなやめられへん」という言葉から始まった。私は、生きるという表現は切実につながっていると感じている。そして、自分たちの町をもっと知ることに足着いた「文化政策」を進めることが、自治につながっていくと思う。▶次回は29日



インドネシアの楽器ガムランを奏でる多田さん(右端)＝大阪市西成区

# あいりん生活 オペラに

## NPO主催講座 受講の30人

### 歌や俳句で日常表現

がらん、ころん。地域の人  
が集う通称・三角公園の近く  
の倉庫で、青銅が神秘的な音  
を響かせる。27日のリハーサ  
ルで多田雄一さん(68)らがイ  
ンドネシアの楽器ガムランを  
奏でる中、仲間たちが伸びや  
かに舞い続けた。

出演するのは、60〜70代の  
男性を中心とした約30人。同  
区のNPO法人「(コ)ルム」と  
は「この部屋(コ)ルム」と  
ム」が主催する「釜ヶ崎芸  
術大学」(釜芸)の受講生た  
ちだ。釜芸は地区のさまざまな  
な施設を会場に詩や書道、哲  
学など年間約100講座を無  
料で開講。日頃の学びの成果  
として歌やダンス、自作の詩

### 大阪・西成で31日上演「楽しく生きる」テーマ

「死や命について考えても  
らい、この先一人で生きてい  
くことになるかもしれない人  
たちには『こうして楽しく生き  
ていけますよ』と伝えたい。」  
とテーマを選んだという。上  
演は31日午後1時から、西成  
区民センターで。

や俳句を披露する。  
多田さんは大学生のとき、  
「マーシャヤや騎馬を覚え、  
酒に溺れた。以来、稼いだ金  
をギャンブルに費やす日々が  
続いた。46歳からこの地で暮  
らす。1個1円の空き缶拾い  
で生計を立て、1畳半の簡易  
宿泊所での生活も経験した。  
釜芸には2012年の開校  
時から通う。「文化や芸術に  
関心のある仲間と出会い、よ  
うやく本来の自分に戻りつつ  
ある」と感じている。ギャン  
ブルからは自然と足が遠の  
き、酒量は減った。  
本番では賛美歌「アメリジ  
ング・グレース」など生曲も  
歌う。「ありのままの姿を見  
せるだけ。自分が楽しめば、  
見る人も楽しんでくれるは  
ず」と多田さん。

日雇い労働者やホームレス  
が多く暮らす大阪市西成区の  
釜ヶ崎。年の瀬、一角にある  
萩之茶屋南公園(通称・三角  
公園)で、和歌山大学教授(天  
文学)の尾久土正己さん(54)  
が天体望遠鏡を持ち込み、星  
を見る会を開く。周辺で暮ら  
すおじさんたちと冬の空を見  
上げる一日だ。

### 日雇いの街で星を見る

始めたのは2009年12  
月。釜ヶ崎で芸術を通じて人  
の輪を広げる活動に取り組む  
詩人、上田假奈代さんから釜  
ヶ崎の人たちに星の話をし  
て「頼まれたのがきっかけ  
だった。  
最初は講師として話すだけ  
のつもりだった。ところが、  
参加者の熱心さにほだされ、  
会場の懇談室から路地に出  
て、肉眼で星空を見上げた。  
その時、夜空で瞬いていた

イラスト・平野 恵理子



### うたた寝

タンキリマメ マメ科  
のつる性多年草。暖かい  
山野に生える。種は民間  
療法の去痰薬に使われ  
る。名前もそれに由来。

のが織姫。尾久土さんが「光  
の到達速度を考えると、目に  
しているのは約25年前の輝  
き。あの頃は景気が良かった  
ね。何をしたら」と参加者に  
尋ねると、1人が「大きな仕  
事」と答えた。  
やりとりを通じて「星は立  
場などに関係なく、万人の頭  
上にある」との思いが去来す  
る。この当たり前のことが新  
鮮に感じられた。もっとよく  
見てもらおうと「1週間後に  
望遠鏡を持ってきます」と伝  
えている。以後毎年、お盆と  
年末の2回、小一時間、星の  
話をした後、天体望遠鏡をみ  
んなでぞくぞく。

(編集委員 小橋弘之)

# おおさか

## まほびやの宝



大阪市西成区で20  
12年に開校した無料  
公開講座「釜ヶ崎芸術  
大学」(通称、釜芸)  
が2014年度から、  
同区内の中学・高校や  
保育園に「出張」を展  
開している。さまざま  
な理由で勉強ができ  
ず、学び直す「おっ  
ちゃんたち」を並べ、

生徒たちにとっては大  
きな刺激になっている  
という。釜芸を運営、  
企画するNPO法人  
「コ(ル)ム」代表の  
上田假奈代さんは「い  
つもと違う出会いか  
ら、何かを感じ取っ  
てもらえたら」と期待を  
込める。

釜芸は書家や天文学  
者、哲学者ら専門家が  
講師となり、誰でも無  
料で参加できる。ワー  
クショップ形式で作品  
制作などしている。  
釜芸の拠点は西成だ  
が、作品などを展示す  
る成果報告が評判を呼  
び、台湾やタイ、アメ

### 中学・高校などで出張講座



釜芸の天文学の講座で、望遠鏡を校庭に置いて空を見上げる府立西成高校の生徒ら＝上田さん提供

リカなど国内外で注目  
を浴びている。  
地域社会に貢献する  
美術や天文学などの講

### 釜ヶ崎芸術大学

## 「おっちゃん」と生徒 机並べ

座を開いた。15年7月  
には、天文学の講師と  
して尾久土正己と和歌  
山大教授が講義し、校  
庭に望遠鏡を置いて生  
徒らとおっちゃんら  
星を見上げた。「西成  
にこんな空が広い場  
所があったなんて」と  
いう声も上がった。  
書道では半紙に向か  
い、集中して筆を進め  
るおっちゃんらの姿  
に、教室内は静まりか  
えった。書き終わった  
後は生徒らの字を見て  
感想を言い合い、お互  
いの作品をたたえ合っ  
た。  
17年1月には3年生  
らが現代アートに取り  
組んだ。また同区内の  
大阪市立鶴見橋中学校  
では、わかくさ保育園  
で、振り付け師の南  
流石さんと一緒にダン  
スをして汗を流した。  
釜芸では詩の講師も  
務める上田さんは「学  
校で生徒を励ます『お  
っちゃん』の姿を見る  
とはほほ笑ましい。学び  
合える場づくりを続け  
ていきたい」と話して  
いる。

【藤原一郎】

# 釜ヶ崎狂言 人生を舞う

「トリエンナーレ」はイタリア語で「3年ごと」を意味する。「2年ごと」の意の「ビエンナーレ」とも定期的に開かれる美術展や芸術祭を指す。なかでも19世紀末から続く「ヴェネチア・ビエンナーレ」が世界的に知られている。地域の活性化や観光振興への効果もねらい、日本で

## 絵画や彫刻とともに

も「●●トリエンナーレ」や「○○ビエンナーレ」と名づけた催しは活発。釜ヶ崎のおっちゃんたちが参加する「ヨコハマトリエンナーレ」は2001年に始まり、5回目となる今回は11月3日まで開かれている。テーマは「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」。横浜美術館

などで国内外の作家の絵画や彫刻、写真などが展示される。トリエンナーレは横浜のほか、愛知や福岡などでも開催。10年から瀬戸内海の島を舞台に始まった「瀬戸内国際芸術祭」は2回目的の昨年、100日余りの期間中に約107万人が来場した。

## 酒浸りや孤独：役に宿る 20日に横浜公演

日雇い労働、路上生活、アルコール依存……。さまざまな経験をもつ大阪・釜ヶ崎の「おっちゃん」たちが20日、創作狂言に挑む。舞台は横浜の国際現代美術展「ヨコハマトリエンナーレ2014」。波乱の人生を役に投影させる姿は、前を向いて生きようとする力強さにあふれている。

「かしてまってびびるん」と汗をぬぐった。坂下さんは鹿児島出身。33歳の時に妻を亡くし、酒におぼれた。2歳の一人娘と別れ、巡った飯場（日雇い労働者宿舎）は30カ所以上。5年前にはアルコール依存症と診断された。

「なかなか動きを覚えられたい」。そんな思いが募り始めた2年前、釜ヶ崎の文化教室「釜ヶ崎芸術大学（釜芸）」が始まることを知った。NPO「こえこ」とどこころの部屋（通称「コロム」＝06・6686・1612）が主催する講座に加わると、次第に酒が遠ざかっていった。

### 心境にも変化

社会風刺と庶民の笑いが詰まった狂言には、酒盛りの場面が多い。指導する狂言師・茂山重司さん(31)は坂下さんと酒の関係を心配し、酒を飲む所作を教えるか迷った。

だが、坂下さんは「断酒した僕だからこそ、お酒を飲む狂言をしたい」。3話の創作狂言が完成した今年

1月、大阪市天王寺区で催された舞台では杯に見立てた扇から酒を飲み干すしぐさをして「舞台を降りればこれからも一滴も飲みまするまい」と演じきった。心境にも変化が現れ、「おわびの気持ちをおこめて」と一人娘に絵手紙を送り始めた。

「へそまがり、曲がったことが嫌いな玉置さんが演じたらしくりくるんとかやう？」。仲間の声に押され、玉置さんは主役を引き受けた。生活保護を受けながら、アパートで一人暮らし。今は連日数時間の稽古が楽しくて仕方ない。「あちこちぶっかけてばかりの俺の人生も狂言になるんやな。いい冥土の土産をもらったよ」

### 伝わる切実さ

「コロム」代表の上田假奈代さん(44)は「しんどい人生を笑いに変える力があるらしい。彼らの狂言を見ると、私たちが励まされる」。ヨコハマトリエンナーレからは3月に出演の打診があった。アーティストリック・ディレクターを担当する美術家・森村泰昌さんは狂言を記録したビデオを見て、「釜ヶ崎の人たちの切実さ、生々しい表現があった」と話す。

3話の創作狂言は20日午後、主会場の一つの横浜美術館（横浜市西区）で上演される。釜芸の受講者の絵や詩、立体作品も展示されるという。

●メンバーの前で練習する坂下龍征さん（右）  
●大阪府西成区、遠藤真梨撮影  
●大阪市天王寺区の舞台で演じる玉置世士さん



## 釜ヶ崎で「からくり人形」講座

# おっちゃん先生や

大阪府西成区の日雇い労働者の街・釜ヶ崎に「からくり博士」と呼ばれる「おっちゃん」がいる。空き缶を使って電動のからくり人形を作る技術を独学で身につけ、数々の作品を発表してきた。70歳になり、死ぬ前に身につけた技術を伝えたいと思うように。博士の願いを聞きつけた支援者の計らいで今月、労働者たちが芸術などを学ぶ市民大学「釜ヶ崎芸術大学」（通称・釜芸）で講師デビューを果たすことになった。



自分でお酌をしてビールを飲む通天閣の人形について説明する「からくり博士」。手の動きのタイミングを合わせるのに苦労したとやで「大阪府西成区で

【大久保昂、写真も】

博士は大阪市出身。長く大阪を離れて暮らした後、約5年前に釜ヶ崎にやって来た。一緒に住む家族はおらず、何もすることがない日々。大阪市立中央図書館（同市西区）に毎日のように自転車で通い、読書に励んだ。ある日、西洋のからくりを紹介する写真集をめぐって思い立った。「自分でもできるんちゃうか」。自分で空けたビールの缶を材料に、電気で動くからくり人形を作ることにした。

（NPO法人「JUKUMAJU」のSNSでは職業を経験し

たが、電気関係の仕事に就いたことはない。本を参考にしながら、独学で電気配線やハンダ付けを勉強。必要な材料は大阪・日本橋の電気街や100円ショップを回って買いそろえた。

最初の本格的な作品ができるまで、数カ月かかった。「途中で何へんもあきらめそうになったから、ほんまに自信になった。それにな工作の最中はつらいことを何もかも忘れられた」。お通路をする男性やビールを飲む通天閣など、完成させた作品は20を超えた。

昨年70歳を迎え、「自分もいつ死ぬかわからへん。独学で考えた技術を誰かに伝えたい」という思いが強くなった。釜芸を運営するNPO法人「JUKUMAJU」は

講座は28日スタート。講師名は「からくり博士」で、5月26日まで全5回の講座を通して、ビールを飲む通天閣のからくり人形を完成させる。受講には約7000円の材料費が必要。問い合わせは「JUKUMAJU」(06-6966-1010)。

## 独学で技術習得の70歳

## 「風にはこばれて、釜ヶ崎。土の声、土のことば」



「風にはこばれて、釜ヶ崎。土の声、土のことば」の一場面

たちにとっては驚きではないのかもしれない。日雇い労働者が日払いの簡易宿泊所に集

住してきたが、高齢化によって生活保護受給者となってアパートに住まい、死をむかえる。部屋で亡くなれば孤独死。もしくは病院が施設で亡くなるが、お葬式に参列者の姿はほほえない。血縁を持たない単身者の人生の終いの周辺に気づく人は少ない。風の人の土の声はかほそい。ふんぞの気配をにじませ、うなせぬ思いの断片がそとに挟まれる。

わたしたちNPO法人「JUKUMAJU」は、2008年から釜ヶ崎で喫茶店のふりをして場をひらき、地域の人々とともに表現の場をつくりつづけている。12年、まちを大学にみたく、誰もが互いに学び合う「釜ヶ崎芸術大学」を始めた。翌年、西成区の事業としてマスター

トした高齢の生活保護受給者の社会的なつながりづくり事業「ひと花プロジェクト」。この事業にも参画し、毎月8〜9個の表現プログラムをコーディネートしている。聴き取りを手法とするワークを中心に行っている。こうした地道な活動を鳥の劇場を通じて紹介する機会をいただいたり、詩や地図のワークショップを鳥取でも行ってきた。

鳥の演劇祭では、土のまちに、風の人たちが土の声を届けにゆく。ひと花笑劇団はオリジナル芝居「風車」、釜芸からは詩の朗読をお届けする。そして、わたしたちは鳥取盲学校のみなさんと出会い、いっしょにちいさな光のような詩のこころで発表を「こころ」に運ばれて、土の声を耳を澄ませます。

どろどろとした鳥取。大昔から海岸にはさまざまなものが打ち寄せている。これらを目撃して、鳥取はどろどろとした風格をもった感じ。それは土のにおいを持つ。ひるがえって、大阪・釜ヶ崎は人々が流れ着くまち。風のまちはある。

土のまちは、風のまちは人たちがでかかてゆく。これは珍しい感じですが、海よぎきたるものたちを受け入れてきた土のまちは人

# 風の人が届ける声

（上田假奈代・詩人、NPO法人「こころ」とは「JUKUMAJU」の「JUKUMAJU」代表）

■メディア掲載

掲載年月	掲載紙誌	見出し	掲載年月	掲載紙誌	見出し
2012/1/20	i-link(雑誌のコラム)	釜ヶ崎芸術大学	2015/4/15	日本経済新聞(夕刊) 時代の創造手	詩人上田假奈代さん(45) 西成・釜ヶ崎に表現学び合う場「文字や絵で人とつながれる」
2012/7/27	朝日新聞「窓 論説委員室から」	一泊1800円	2015/8/25	グリーンズ(ウェブマガジン)	釜ヶ崎のおじさんたちとヨコハマトリエンナーレへ!「コロシアム」 上田假奈代さんに聞く、「自分のことばで美を語る」ということ
2013/2/25	毎日新聞	「歌詠み 前を向く」	2015/10/22	毎日新聞 ぶんかのミカタ 大阪の文化再生を考える(中)	上田假奈代 町を知り、地に足を着け
2013/3/29	朝日新聞「第5回関西スクエア賞」	釜ヶ崎芸術大学・主宰上田假奈代さん	2015/12/19	日本経済新聞 うたた寝	日雇いの街で星を見る
2013/5/15	朝日新聞「ひと」	大阪・釜ヶ崎に芸術大学を創設した詩人 上田假奈代さん(43)	2016/1/29	徳島新聞	あいりん生活 オペラに NPO主催講座 歌や俳句で日常表現
2013/5/16	グリーンズ(ウェブマガジン)	ホームレスのおっちゃんの作品に”グッとくる”! アートで釜ヶ崎の課題解決を循環させる「コロシアム」	2016/3/1	朝日関西スクエア	「アート」する市民たち 踊らにゃ損、損。釜ヶ崎オ!ベラ
2014/2/7	大阪日日新聞 話題を追う	横浜の晴れ舞台へ 人生投影、たくましさ表現 「釜ヶ崎芸術大学」受講の労働者ら	2016/4/4	共同通信配信 神戸新聞(夕刊)、高知新聞(夕刊)ほか	労働者の街にアート宿 カフェ併設、「交流の場に」
2014/8/8	CINRA.NET(ウェブマガジン)	ホームレスと日雇労働者の街が生んだ、おじさんたちのアート	2016/6/15	東大阪新聞:西成ジャズ物語24(小川秀人)	上田假奈代さん 西成に交流の場を作った詩人
2014/9/18	朝日新聞(夕刊)	釜ヶ崎狂言 人生を舞う 酒漫りや孤独…役に宿る 20日に横浜公演	2016/6/28	大阪日日新聞 美のかたち芸術のことば26 阪大アートメディア論研究室(松井浩子)	ゲストハウスとカフェと庭コロシアム こころの泉、湧き出る所
2014/10/1	朝日関西スクエア	魅せました!我らが釜ヶ崎 釜ヶ崎 in 横浜トリエンナーレ	2016/11/24	日本海新聞 演目から 鳥の演劇祭9(上田假奈代)	「風にはこぼれて、釜ヶ崎。土の声、土のことば」風の人が届ける声
2014/10/25	朝日新聞be「フロントランナー」	表現学ぶ場、生きる力届ける	2016/12/16	中日新聞	大阪・西成のゲストハウス「コロシアム」詩と書と「おっちゃん」と
2014/11/27	共同通信配信 大阪日日新聞、愛媛新聞、 四国新聞ほか「越境者たち 知の現場から7」	詩人上田假奈代 表現通じ、学び合う場を:釜ヶ崎のおっちゃんたちと	2017/1/17	静岡新聞	自由な線で「力強く」三島で芸術ワークショップ児童100人参加
2014/12月号	芸術新潮	異質な国際美術展横浜トリエンナーレ2014	2017/1月号	商店建築	表現と学びの場「ゲストハウスとカフェと庭コロシアム」
2014/2/7	大阪日日新聞	「釜ヶ崎芸術大学 人生投影、たくましさ表現」	2017/2/21	朝日新聞	釜ヶ崎発 パワフルに 日雇い労働者ら
2014/12/1	朝日新聞「夕べに考える」	「詩の映画」に思う	2017/3/6	共同通信配信:愛媛新聞、新潟新報、 山梨日日新聞ほか「ルガ潮流」	生活の中にある芸術
2014/6/9	うたごえ新聞	おっちゃんたちのハーモニー	2017/3/25	毎日新聞(大阪版) まなびやの宝	「おっちゃん」と生徒机並べ 中学・高校などで出張講座
2014/3/1	ソトコト	学びたい人が、誰でも学べる場を一釜ヶ崎芸術大学	2017/3月号	雑誌旅行読売	日本一のドヤ街にゲストハウス
2015/2/21	大阪日日新聞	おっちゃんたち舞台でハツラツ 釜ヶ崎芸術大学成果発表会	2017/4/11	日本海新聞 ワイド鳥取	子育て、妖怪テーマに 和気あいあい合作俳句:鳥取・産後ケア施設
2015/2/21	東京リビング	釜の中から見上げる空に助ける何かをみつける	2017/7/1	シアトル大学ウェブジャーナルFIELD	Isolation and Neighboring Relations in Osaka's Kamagasaki The Gaps and What Breaks Through Them. To Express is to Live.
2015/2/10	毎日新聞(夕刊) 憂楽帳	釜ヶ崎の詩	2017/10/18	大阪日日新聞	貧困のはざままで 多彩な課題の調整役を
2015/1学期号	帝国書院 現代社会へのとびら(教員用冊子)	さまざまな人が集う「釜ヶ崎芸術大学」	2017/12/11	朝日新聞 夕べに考える	年賀状プロジェクト
2015/3/3	大阪日日新聞	おっちゃんら堂々舞台	2018/1/13	毎日新聞(大阪版) まなびやの宝	一人暮らし釜ヶ崎住人に賀状 貝塚市津田小学校
2015/4/1	日経回廊	大阪・釜ヶ崎は美の拠点になりうるか?	2018/4/23	毎日新聞(夕刊)	おっちゃんが先生や 釜ヶ崎で「からくり人形」講座

■テレビ取材

放映年月	番組名	タイトル	放映年月	番組名	タイトル	放映年月	番組名	タイトル
2015/3/1	スカイパーフェクトTV egg	詩人たちの街・釜ヶ崎	2015/5/23	NHK 目撃日本列島	心の扉をあけて 釜ヶ崎芸術大学	2018/10/13	NHK ETV特集	ドヤ街と詩人とおっちゃんたち ～釜ヶ崎芸術大学の日々
2015/5/15	NHK かんさい熱視線	人生に“生きがい”を～釜ヶ崎芸術大学の日々	2017/10/7	MBS VOICE	労働者の街釜ヶ崎と芸術のコラボ			

■実施記録

年度	期間	講座数	講座名	参加者数	特徴	参加団体など
2012	11/19~2/4	39	表現、宗教学、哲学、お笑い、天文学、感情、ファッション、詩、書道、音楽、絵画、狂言、ダンス、合唱、地図、芸術	576	参加者のほとんどは釜ヶ崎在住のおじさんたち。 企画・ディレクター：植田裕子（～2014年）	
2013	9/6~3/29	66	表現、音楽、詩、天文学、書道、感情、ガムラン、哲学、お笑い、絵画、狂言、合唱、ダンス、感情、写真、芸術、地理	1114	釜ヶ崎狂言会	
2014	自主ゼミ等 + 7/14~3/23	95	感情、合唱、詩、哲学、表現、脳、天文学、写真、即興オー！ケストラ、地理、書道、音景（サウンドスケープ）、ダンス、探検、衣装、ガムラン、舞台美術、アートマネジメント、釜ヶ崎オ！ペラ、芸術	1551	自主ゼミ、ヨコハマトリエンナーレ2014参加、台湾での展覧会「逆棲」、釜ヶ崎狂言会 協働：大阪市立大学アートの活用形?!・釜ヶ崎オ！ペラ	北海道から支援者チーム、 獨協大学ほか
2015	4/8~3/24	106	合唱、詩、浪曲、ダンス、美学学会、数学、感情、哲学、地理、写真、表現、脳と視覚、書道、男女と色恋、天文学、民俗芸能、狂言、即興ダンス、映画音楽、コロシアム、音景（サウンドスケープ）、ガムラン、演劇、衣装、ワヤン、インドネシア語、釜ヶ崎オ！ペラ、即興!!!ガムラン舞踊劇	1899	大学院 美学学会、鶴見橋中学校・西成高校への出張 統括：上田假奈代（2015年～） 協働：大阪市立大学アートの活用形?!・釜ヶ崎オ！ペラ	新今宮小学校、 獨協大学ほか
2016	4/2~3/25	71	音読、詩、ことばとからだ、合唱、美学学会、統計、感情、建築、演劇、行動学、狂言、ことばときぼう、即興オ！ンガク、天文学、ダンス、表現、男女と色恋、釜ヶ崎オ！ペラ、体験講座（哲学・ダンス・詩/天文学/映画鑑賞）、俳句、地理、おかゆのしあわせ、美学、創作かるた、SF、脳と美術、音景（サウンドスケープ）、映画・小説・漫画でめぐる釜ヶ崎まちあるき	1307	群馬・アーツ前橋「表現の森」、 静岡三島・大岡信ことば館「釜芸がやって来た!」、 協働：大阪市立大学アートの活用形?!・釜ヶ崎オ！ペラ 鳥の演劇祭参加、ガムランチーム OMOIDE 結成 共催：三徳寮（2ヶ月に一回）	追手門学院高校、 群馬大学、東京大学、 YMCAの高校生ほか
2017	4/5~3/24	85	合唱、教授会、ついやっちゃん行動学・音楽、詩、ことばときぼう、俳句、美学、おかゆのしあわせ、まちあるき釜ヶ崎、感情、服飾、音読、書道、SF、表現、天文学・天体観測、照明、哲学、釜ヶ崎オ！ペラ、けんきゅうのつくりかた、感字をつくろう、脳と表現、男女と色恋、鳥の演劇祭10 みんなでGO! 合作5・7・GO!、書、ジャワ釜舞踊、オーケストラ!、ことばとからだ、音景（サウンドスケープ）、地理、かきぞめ、かるた、ラジオダンス、建築、鳥の質問箱、狂言、歌曲づくりと芝居	1365	鳥の演劇祭参加、 運営体制のひろがり・あまぶー結成	花園高校、追手門学院高校、 神戸大学、大阪大学、 フランスの高校生ツアーほか

■おでかけ釜芸

年度	出かけたところ
2014	ヨコハマトリエンナーレ2014、台湾・鳳甲羅美術館
2015	台湾・駁二芸術特区、八戸、大淀町図書館まつり、世界のしょうない音楽祭（豊中）、こどもの里、名村造船所（森村泰昌撮影現場見学ツアー）、鶴見橋中学校、西成高校
2016	群馬・アーツ前橋「表現の森」、静岡三島・大岡信ことば館「釜芸がやって来た!」、鳥取・鳥の演劇祭、鶴見橋中学校、西成高校、三徳寮、森村泰昌展覧会（国立国際美術館）、展覧会「白日会」（阿倍野近鉄アート館）
2017	鳥取・鳥の演劇祭、わかかさ保育園、ジャワ釜舞踊発表会（大阪市立大学高原記念館都市研究プラザ）
2018	福島・はじまりの美術館「アラワシの詠」、花巻・るんぴにい美術館「ええ街やで、こは。～コロシアムと釜ヶ崎芸術大学」

■これまでの助成

<p>大阪市、全日本冠婚葬祭互助協会、福武財団、  おおさか創造千島財団、大阪市立大学先端的都市研究、  大阪コミュニティ財団、LUSHチャリティバンク、  大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム、  アサヒアートフェスティバル、  損保ジャパン日本興亜福祉財団、キリン福祉財団ほか</p>
---



釜ヶ崎芸術大学のデータ一覧

2012年からはじまった

釜ヶ崎芸術大学の概要

数字でみる釜芸

掲載された新聞記事から

みえてくる釜芸の多様性

た。2002年に創設されたストリートワイズ・オペラは、いまではイギリス全土に10カ所の拠点を持っており、マットさん自身は、今後は後進にストリートワイズ・オペラの運営を委ねて、ウィズ・ワン・ボイスの国際的なネットワーク作りに専念する予定であるという。ココルームの方は、すでに何度か述べたように、人的・資金的に安定しているとは言いがたく、近い将来にストリートワイズ・オペラやマットさんの活動のように全国的に、さらには国際的に拡張していくことは想像しにくい。しかしマットさんは、上田さんと私と話す中で、ココルームにはストリートワイズ・オペラにはない長所があると語った。ストリートワイズ・オペラがオペラの上演という「プロジェクト」を行っているのに対して、ココルームはカフェとゲストハウスを持ち、さらに釜芸自体が多様なプログラムを含んでいることで、「プロジェクト」にはとどまらない一つの「社会」あるいは「世界」を作っている、というのである。

たしかに私から見ても、ココルームや釜芸の特徴は、何か作品を作ったり上演したりすることだけを目的とするのではなく、人と人の出会いから生まれる思いも寄らない表現や言葉のやりとりが、その後の人生に働きかけていく、その一つ一つの小さなできごとを大事にしていくことである。これはココルームと釜芸が、釜ヶ

崎に常にあり続け、さまざまな背景と関心を持つ人々に開かれて、そこで出会う一人一人の人生を大事にしているからこそ、可能になるものだろう。マットさんはそのことをよく理解している。また上田さんはそのようなマットさんの洞察を信頼しているからこそ、活動のあり方に違いはありつつも、深い信頼関係を培うことができた、そのように私は感じたのだ。

### 実践は、つぎの展開の鍵

4月13日から8月9日まで、4ヶ月にわたったカマハンは、このように紆余曲折しつつ、受講生にとっても、私にとっても多くの学びをもたらしてくれた。一時期は戸惑っていた学生たちも、その思いを率直に語ることを通じて、釜芸という場所になじんでいったように見受けられた。そこには、ココルームで食べたまかないごはんの味も一役買っていたにちがいないと私は踏んでいる。

カマハンの締めくくりには、「学生自治総会」として、カマハンを受講した阪大生たちが、釜ヶ崎が10年後にどうなっているのかを想像して、それを念頭に釜芸に対して提案を行うことを、カマハンの最終講座として開催した。学生たちは、これまで見聞きしたことを自分なりに咀嚼して、釜ヶ崎の写真展や、釜ヶ崎の歴史を記録する『釜ヶ崎日記』、死について気軽に語り合う

場としての「デスカフェ」など多彩な提案をしてくれた。カマハンの4ヶ月は私にとっては、反省点や課題の多い経験だったが、「学生自治総会」でのそれぞれに真剣な提案に接して、たしかな手応えを感じることができた。

「学生自治総会」では、私自身は釜芸への提案をすることはなかったのだが、もし私が釜芸に何かを提案するとすれば（それは私自身に対する提案でもあるのだが）、この4ヶ月の経験を糧にして、釜芸と阪大との協働を深めていくことのほかにはない。今回のカマハンは、釜ヶ崎と阪大の取り合わせがめずらしいということで一部のメディアにも取り上げられたけれど、この取り合わせがごく当たりまえのものになり、二つあわせてはじめて「ほんとうにほんもの」の大学になると認められるようになる、その日を目指しつつ、取り組みを継続させていきたい。



田中 均 Tanaka Hitoshi

大阪大学准教授(COデザインセンター／大学院文学研究科)。専門は美学、とくに近年は芸術における「参加」をめぐる諸問題にとりくむ。著書に『ドイツ・ロマン主義美学』(御茶の水書房、2011年)など。



は、「自分たちが持っている偏見と向き合うことが苦しく、受講生たちのあいだで話していてもその答えが出ない」といった、大学の教室で体感として学びにくい、個人が社会と向き合うことの根本に関わる悩みまで、多岐にわたった。これらの言葉は、私や上田さんだけでなく、コクルームのスタッフや「あまぶー」によっても共有され、その後、私の見る限り、受講生と釜芸を支える人たちとは、遠慮することなく釜芸について真剣に語り合うようになった。

マットさんがカマハンのあり方について考え直すことを可能にしてくれたもう一つの理由は、マットさんが今回のコクルームでの滞在中に、自分自身の活動について、さらにコクルームと釜芸について、その意義を語る言葉を多く残してくれたことである。

例えば、マットさんはカマハンの講座で、自分の「哲学」を語るために、穴の空いた壺の寓話を語ってくれた。ある人が井戸で水くみをするために、穴の空いた壺を用いたので、持ち帰ったときには壺がすっかり空になってしまったが、その人にまた別の人が、「水が漏れてしまったことを残念に思うことはない、あなたが歩いてきた道には、花が咲いているではないか」と語ったという。この寓話はいろいろな仕方でも解釈できるだろう。社会の中では、水が象徴する物質的

な支援だけでなく、花に象徴される文化的な支援もまた必要だという意味で理解するのが、マットさんの活動の趣旨に一番合っているのかもしれないが、もっと単純に、水を得るという自分の利益だけを考えるのではなく、花という他者を助けることの意義を語ったのだとも理解できるだろう。また、人生の中で挫折をしてきた人も、周りの人々にとってはかけがえのない存在であるという意味かもしれない。短期的な視点では失敗であるように見えることも、長い目で見ればその後の活動に生かされるという意味かもしれない。マットさんの寓話はこのように、さまざまな読み方ができ、アートを通じて社会的課題に向き合うときに心に留めておくべきことを教えてくれるものだった。

### 「プロジェクト」と持続性

マットさんは講座の中で、寓話以外にも「ジグソーモデル」を用いて活動の理念について語った。ホームレスの経験を持つ人々に対する支援は、多くの場合、まずは住居・食事・医療の支援、その次に職業訓練、そして最後にアートやスポーツへの参加といったように階層化されている。けれど、ホームレス状態になる原因は物質的な欠乏だけではなく、自己評価の低さや社会的孤立にもあるのだから、(ジグソーパズルの場合にピースが組み合わされてはじめて一つの絵を表すことができるように) アートを含めた多様な支

援が組み合わされることによってはじめてホームレスという課題に有効に働きかけることができる。これがジグソーモデルを通じてマットさんが訴えたことだった。壺の寓話と同じく、ジグソーモデルも、マットさんの活動に限らず、釜芸の理念や意義を語る時にも有効な考え方を示してくれるものだった。

その一方で、講座や打ち合わせのなかでのやりとりからは、ストリートワイズ・オペラと釜ヶ崎芸術大学、あるいはマットさんと上田さんの活動の方向性の違いも感じ取ることができた。マットさんは、ストリートワイズ・オペラのワークショップの参加者は自分自身のバックグラウンドをいったん「戸口に置いて」、ワークショップに参加することができるとし、そのことがワークショップの場所の「セーフさ」を意味すると述べた。あえて対比するなら、釜芸やコクルームのこれまでの取り組みは、場の「セーフさ」を重視することでは同じだが、釜ヶ崎に暮らす人々が、それまで語りづらかった自分のバックグラウンド(人生)について語り出せるような場を作ろうとしてきた点では、違いがあると言えるだろう。

また、活動の展開の仕方という点でも両者の違いは大きく、そこには文化芸術をめぐるイギリスと日本の状況の違いも見て取ることができ

かが、状況に慣れていく中で惰性になってしま  
うと、相手を搾取する関係になってしまうため、  
そうなる手前で屋台をたたむようにした」と語っ  
た。武田さんの言葉からは、俳優としての経験  
にもとづいて、屋台とそれを取り巻く空間を一  
種の「舞台」として捉えるという独特な視点がう  
かがわれる。つまり、その空間のなかにいる人々  
がどのように振る舞い、どのような関係を取り  
結んでいるのか——その状況が緊張感を伴って  
いるのか、弛緩しているのか、歓待する場にな  
っているのか、排他的な場になっているのかを感  
じ取り、その状況に、自分の振る舞い方の微妙  
な変化によって働きかけるといふ、演技的でも  
あり演出的でもある関わり方を、武田さんはとっ  
ていた。そのことが私には印象的だった。さら  
に興味深かったのは、武田さんがふり返りの最  
後に語った、「実際のところ、成功も失敗もない」  
という言葉だった。状況が弛緩して、一方が他  
方を搾取する関係になることを避けつつも、最  
終的には共有された場のどのような振る舞いも  
広い意味での表現として肯定する、そのような  
俯瞰的な視点を武田さんが持っているように私  
には思われた。

## 大学の教室の外で学ぶ

これまで述べてきたように、釜ヶ崎芸術大学  
と大阪大学が協働したカマハンでは、単に阪大  
生が釜芸を体験するだけではなく、次のような

主題を学ぶことを目指した。つまり、釜ヶ崎と  
いう地域の変容、それに応じた釜芸自体の役割  
の変化、さらにそれぞれのゲストアーティスト  
が持つ「表現の場を作る」技法と、その技法が釜ヶ  
崎との出会いの中で用いられるプロセス。正味  
4ヶ月間の授業の目標としては、これはかなり野  
心的なものであった。遅まきながら私がそれに  
気づいたのは、カマハンの授業が半分ほど終わっ  
た6月の中頃になってのことだった。まちあるき  
に参加している受講生たちが、街とそこを行き  
交う人々のありようを見て取ることにあまり集  
中できていないような印象を受けた。

そのような懸念を私が抱いていた時期に、カ  
マハンのあり方を考え直し、授業を立て直すこ  
とを可能にしてくれたのは、ゲストアーティスト  
の一人であるマット・ピーコックさんだった。  
マットさんは、ホームレスの人々とともにオペ  
ラを制作するイギリスの団体「ストリートワイ  
ズ・オペラ」(Streetwise Opera)を2002年に設  
立し、現在もアーティストック・ディレクター  
を務める。そのかわり、2012年からは、ア  
ートを通じてホームレスの問題に取り組む諸団体  
の国際的なネットワーク作りのための活動「ウィ  
ズ・ワン・ボイス」(With One Voice)に取り組  
んでいる。マットさんとコクルームとの関係は、  
2008年に上田さんがブリティッシュ・カウンシ  
ルのコーディネーターでイギリスを視察したとき

にマットさんと出会ったことに始まる。翌年  
にはマットさんが来日して釜ヶ崎でワークショップ  
を開いた。2015年にはストリートワイズ・オ  
ペラのメンバーを釜ヶ崎芸術大学に招き、2016  
年にはリオ・オリンピック文化プログラムでの  
ウィズ・ワン・ボイスの活動に上田さんが招聘  
されるなど交流を深めてきた。

マットさんは、二つの意味で、カマハンのあ  
り方を再考することを可能にしてくれた。一つ  
は、私の懸念に答えて、これまでのカマハンに  
ついて阪大生とふり返る機会を設定してくれ  
たことである。釜芸のよいところと疑問に思うと  
ころを書き出す作業を通じて、受講生はこれま  
でのカマハンのなかで感じていた疑問や不満、  
不安を率直に言葉に出した。それは、「カマハン  
の目的は何なのか」という、先に触れたカマハン  
の野心的な狙いに由来する疑問、「釜芸の中で自  
分たちはお客様扱いされているように感じるの  
で、そうならないようにしてほしい」という、「現  
場」に入っていくことに由来する戸惑い、さらに



承していくことも重要になってきていること。

これらのことをふまえた上で、釜芸がこれからどうなろうとしているのか、どうなるとよいのかについて、阪大生たちとともに考えて欲しかったのである。私が授業の科目名を「協働術」、副題を「表現の場を作る」としたのは、そのためである。

「表現の場を作る」という観点は、カマハンのために4人のゲストアーティスト（武田力さん、深澤孝史さん、マット・ピーコックさん、藤井光さん）を招聘するときにも重視していたことだった。ゲストアーティストとしては、何らかの仕方で「表現の場を作る」ことに取り組んでいる人、しかも、外部の視点を持って現場に入っていく、地域とそこに生活する人々と出会う過程を私たちに見せてくれる人をお願いしよう、というのが上田さんと私との考えだった。そのため、カマハンの枠組みのなかでは、それぞれのゲストアーティストは、まず地域史研究家の水野阿修羅さんの案内のもとで街を歩いたあと、上田さんと私とともにまちあるきの感想と地域の状況についての認識を共有した。それから翌日に開く講座について（しばしば夜がふけるまで）打ち合わせを行ったのだった。もちろんココルームの全面的な協力のもと、事前に可能な準備は周到になされたのだが、アーティスト、上

田さん、私の三者が講座の前日に、まちあるきをふまえて、納得のいくまで話し合うことに重きが置かれた。

### たこ焼きによる場作りを俯瞰する

「表現の場を作る」ことに取り組んできたアーティストが、釜ヶ崎で地域とそこに生活する人々と出会うことを試みた例として、5月に講師を担当された武田力さんの場合を挙げよう。武田さんはかつてマニラのスラムに滞在し、武田さんが屋台で作るたこ焼きと、スラムに住む人々が武田さんに対して見せる表現とを交換するというパフォーマンスを行っている。フィリピンではタコを食べる習慣はなく、最近では日本食としてたこ焼きが流行しているが、タコは入っていないという。武田さんがパフォーマンスのなかでタコ入りのたこ焼きを振る舞ったのは、日本がフィリピンを占領した戦争の記憶について考え、語り合うためであり（タコは海の中で人間の遺体を食べるとも言われている）、実際に武田さんはスラムの人々にそのように説明したという。

カマハンの場合、マニラの場合とは異なり、表現とたこ焼きの交換を介して、どうやって出会いが可能になるのかということが主題となった。武田さんはあいろんセンターに屋台を開いて、表現との交換でたこ焼きを振る舞った。そして阪大生を含めた釜芸の参加者は、あいろん

センターに加えて、禁酒の館、支援ハウス路木、ふるさとの家のそれぞれの玄関先に屋台を設置し、前日に制作したダンボールの看板を掲げて、釜ヶ崎のまちを歩く人々、主に地域で生活するおじさんたちに声をかけて、表現とたこ焼きとの交換を試みた。学生たちも私も、「表現」という言葉ではおじさんたちに上手く伝わらないのではないかと思って、「一芸をして下さい」とか、「自分ならではの何かを見せて下さい」と言いかえながら、はたしてそれが適切なことなのかというためらいもまた感じつつ、遠慮がちなおじさんたちになんとか関心を持ってもらおうと奮闘した。



たこ焼き屋台自転車準備する武田力さん。ココルームの庭

屋台終了後のふり返りの中で武田さんは、「たこ焼きを振る舞う側と表現を見せる側のどちら

中で、上田さんもやはり同じ思いを持っていることが分かった。上田さん自身、むしろ釜芸の方に大学の本質があるのではないかと問いかけるために、阪大で出張講義をしてくれたのだった。

### 自分も役割を果たすことができる

釜芸のなかに「ほんもの」なところがあると思うようになったのは、2年前に釜芸で「美学」の講座を持つようになってからのことだった。その講座では、関心を持って来てくださった方、さらに、そこにたまたま居合わせた方といっしょに、あるときは「芸術」という言葉について、またあるときは「美しい」という言葉について思うことを語り合った。そのなかで私が経験したのは、やりとりを通じて、親しい間柄でもなければふだんは語られないような、それぞれの人の思いや、経験してきたできごとが、ときには訥々と、ときには饒舌に語り出され、それがその場にいる人たちに共有されるという場のあり方だった。そのなかで特に記憶に残っているのは、病床にいるときには何を見ても美しいと思えなかったのだが、回復するとともに花や風景など周りのものにみずみずしい美しさを感じられるようになったという話だった。そうした講座を経験するうちに私は、釜芸が目指しているものが、ふだんはさまざまな理由で制約されている表現が可能になる場であり、さらにはその前提

として、他者による表現が肯定的に受けとめられる場であり、そのような場作りのために自分も役割を果たすことができると感じたのだった。

私の考えでは、そのような場のあり方は、制度化されている大学が本来目指していながら、なかなか実現できないでいるものだった。教員と学生との権力関係によってか、あるいは学生どうしの間にはたらく同調圧力によってか、本当はそれぞれに多様な背景や考え方を持っているはずの学生が、教室という空間のなかで「自分の言葉」を語ることに消極的なのを私はいつも気にしていた。そこで考えたのが、阪大生たちを釜芸という場のなかに置くことだった。制度化された大学の教室以外にも、学びの場、表現の場があり、そこでは、他者の表現を肯定的に受けとめる場づくりが目指されていると彼女たち・彼らが体験的に知ることができるのではないかと、その体験によって、彼女たち・彼らの意識が変わり、大学の教室にもよいフィードバックをもたらすのではないかと考えたのである。

### まちに学ぶ、まちと学ぶ

しかし、私が狙っていたのは、単に阪大生が釜芸を体験することだけではなかった。私が学んで欲しいと思ったことは、釜芸の由来から将来への展望にいたるまで多岐にわたっていた。まず釜芸が生まれた経緯である。かつて日雇労働者の街として知られ、現在は主に男性の単身高齢者が多く住む釜ヶ崎で、高齢化・貧困といった「課題」、そこから生じる社会的孤立やアルコールなどへの依存といった「問題」に、表現という方法（単に表現を生み出すだけではなく、他者の表現を受けとめることも含む）によって取り組むため、釜芸という場が生まれた、と一応は説明できる。だが、釜芸が目指してきたことは、「課題」や「問題」を名指してそれを「矯正」・「改善」・「解決」するよりもむしろ、釜芸という場の中でおじさんたちと声を掛け合い、その生活に寄りそうなかで、変化の可能性をさぐっていくことなのである。さらに阪大生には釜芸が経験してきた変遷と現状も学んで欲しいと考えた。例えば、現在の釜芸が、それぞれに固有の動機を持つ、釜ヶ崎内外の人々の協力によって運営されていること。その一方で、前にも触れたように、人的にも、資金的にも不安定であり脆弱さを抱えていること。地域の高齢化の進行と、外国人観光客向けのホテル街への再開発の過程で、街が「上書き」され、場所の記憶が失われようとしていること。そのなかで釜芸自体も、その参加者の主体が、釜ヶ崎のおじさんから、「釜ヶ崎に学ぶ」ために来訪する人々へと移行していること。そして釜芸の活動の重点も変化しており、表現を通じて地域の課題に向き合うことだけでなく、その表現を残し、地域の記憶と地域に蓄積された知恵を次の世代へ、さらに釜ヶ崎の外へも継

# 「カマハン」のあった 4ヶ月とそれから

田中 均

## ほんものと、ふりの間で

コカールームを紹介するとき、上田假奈代さんはいつも、「かつては喫茶店のふりをして、いまはゲストハウスのふりをしているんです」と話してくれる。その言い方を借りるなら、釜ヶ崎芸術大学は「大学のふりをしている」ということになるだろう。上田さんのお嬢さんの小木海さん(8歳)は、「釜ヶ崎芸術大学」という言葉を聞くといつも、「私知ってるで、釜ヶ崎芸術大学って、大学って言うだけやで！」という身も蓋もないことを言って、周りの大人を苦笑いさせているが、たしかに、「そんなことないで！」という人はいない。

そんな「ふり」をしている釜ヶ崎芸術大学が、「ほんもの」の大学で授業をする、というできごとが、2018年4月にあった。4月13日に、釜ヶ崎芸術大学が大阪大学豊中キャンパスを訪問し

たのである。上田さんをはじめ、釜芸にゆかりのあるおじさんたち、コカールームのスタッフのみなさん、釜芸をボランティアで支える「あまぶー」のみなさん、そのほか釜芸に縁を持つみなさんと、大阪大学の学生、教職員、そして近隣の住民のみなさんとが出会った。おじさんたちが釜ヶ崎との出会い、釜芸との関わりについて講義してくださったのだが、この授業のために上田さんは、「釜芸 in 阪大 ほんまもの大学で釜芸がしっちゃかめっちゃか」というタイトルを考えた。「ほんもの大学」の大阪大学に対して、「大学のふり」をしている釜芸が乗り込んでいて、マジメを遊びが引っかけ回すという逆転の妙に面白さを感じた人もいただろう。

## 協働するとは

ふりかえてみると、私自身も似たような語り方をしていたかもしれない。私は、4月の「釜芸 in 阪大」を皮切りとして、8月までのあいだ釜芸と阪大とが共同で行う授業に、阪大側の担当者として参画した。大阪大学COデザインセンターの開講する科目「協働術H」の受講生は、「釜芸 in 阪大」のあとは自分たちが釜ヶ崎に通って、ゲスト講師として招かれたアーティストたちとともに街を歩き、そのゲストが企画した釜ヶ崎芸術大学の講座を、阪大生以外の釜芸参加者とともに受講した。この釜芸と阪大のコラボレーションのことを、釜芸では「カマハン」と呼んで

いたのだった。この授業をするなかで、受講生を含めているいろいろな人に、なぜこのような授業を企画したのかを説明する機会があった。私は一つの理由として、よくこのようなことを言った。「釜ヶ崎芸術大学は、制度化されておらず、人的にも資金的にも基盤が弱く不安定だが、貴重な学びの場、表現の場なので、制度化された大阪大学が関与して二つが協働することによって、これまでできなかったことが可能になるのではないかと考えた」。こういう言い方は、「制度化」されていない、つまり大学の「ふり」をしているにすぎない釜芸を、「制度化」されている、つまり「ほんもの」の大学である阪大が助けるかのような「上から目線」の態度に聞こえるかもしれない。

しかし私はそういうことが言いたいのではなかった。制度化されたものが「ほんもの」で、制度化されていないものが「ふり」でしかないと考えたことはない。むしろ逆に、制度化されていない釜芸のほうに「ほんもの」なところがあり、制度化された大学の方に、「ほんもの」になれずに「ふり」にとどまっているところがあるのではないか、そう思っていたのだった。だからこそ、セミナーや講演といったレベルの交流ではなく、釜芸と阪大とが共同で授業をするという踏み込んだ仕方でコラボレーションしたのだ。この文章を書くにあたって、上田さんと会話を交わす

釜芸の参加費は、払える方には一講座千円以上という形をお願いしている。釜ヶ崎地域の外から出席する人も多い。経済的にしんどい人には、お金は気にせず参加を、と呼びかけている。とくさんの、お金のことに関して知らん顔することができない、という今の気持ちに対して、ココルームのスタッフたちはとくに何も言わない。

釜芸には参加しないとくさんだが、表現活動をしないわけではない。2017年の12月、ココルームでは「年賀状プロジェクト」をおこなった。年賀状プロジェクトとは、からくり博士\*の「去年は一通も年賀状が届かへんかった。年賀状くれへんか？」という一言から、釜ヶ崎で独りで暮らすおじさんたちと、彼らに年賀状を送ってみたいという人をつなぐ試みだった。お正月には全国各地からたくさんのメッセージが届いたと、とくさんは話してくれた。手紙をかく、やりとりする、近況を気にしあう相手がいる。そのつながりはつづき、夏にはたくさん暑中見舞いが届いたようだ。

ことしの夏の夜、とくさんは体調をくずし救急車で運ばれた。つぎの日から”お冷や”はアイスコーヒーに代わった。ついつい、「お冷や？」と聞いてしまうけれど、「いやあかんで」と返すとくさん。自律の気持ちが強い。断酒は長く健

康で生きるための行為でもある。

男性の平均寿命が日本一短い釜ヶ崎のまちでは、若くてもからだが弱って亡くなるひが多い。近頃はココルームに来たらスタッフが「おかえり」「あら昨日は天国行かんかった？」と声をかけ、とくさんも「まだ大丈夫やったみたいやな」と笑い合うのが合言葉のようになっていく。きっと死別への恐怖はある。それでも、からっと笑って、「いつむこうに行くのか行かんのか」とやりとりできるのは、ここ大阪・釜ヶ崎スタイルだろうか。「天国」は自分のためでもあり、まわりのためなことばだろう。

そうしたことばは釜芸の講座の時間にだけあるのではない。釜芸に参加するだけが表現活動ではない。人びとが関わり合う日々の積み重ねの中に、ことばとことばが生まれる。そして、今日もまたココルームは開かれていく。

\* | からくり博士 … 缶ビールのアルミ缶を使って、独学でからくり人形をつくる釜ヶ崎在住のおじさん。アルコールとは深い縁で、いちいち名(迷)言を繰り出す。



ココルームのとつぜん書道会の様子。  
とくさん、写真家の齋藤陽道さん、こども、著者、その場の人たちと。



松本 渚 Matsumoto Nagisa

1993年島根県生まれ。大阪大学大学院文学研究科・未来共生イノベーター博士課程に在籍。専門は臨床哲学。被爆者と若者がフランクに語り合う場「はちろくトーク」を主催。現場での実践に基づいた研究を心がけている。釜ヶ崎とココルームに魅了され、2016年より週1でスタッフとして働いている。

## 釜芸の課外で

松本 渚

「よっ、“お冷や”おぬがい。」

屋下がりになると、ココルームの玄関から片手をあげてとくさんがやってくる。とくさんの言う“お冷や”は日本酒のこと。いつも一杯飲みながらココルームのスタッフらとおしゃべりして、スーパー玉出で買い物をして散歩して帰るのがお決まりのコース。ここ釜ヶ崎で暮らす地域のおじさんである。

とくさんとココルームとの関わりは長い。5年ほど前、当時動物園前第一商店街にあったインフォショップ・カフェ・ココルーム時代からの常連さんである。「お客さん扱いなんかしてくれへんで」と笑いながら当時のことを話す。自分で冷蔵庫からビールを取り出すこともあった。なかでもとくさんの役割は、ココルームの刊物の発送作業だった。

よー仕事したわ！ いろんな仕事したでー。  
はんこ押したりな、チラシを切ったり、  
発送したり、なー。チラシなんか  
家に持って帰って家で切りよったで。

事務系作業はお手の物で、当時からココルームの刊物を折りたたみ、誤字を修正し、宛名を書いたシールを一枚一枚正確に封筒に貼り、郵送の準備をととのえる。スタッフたちは、手早くきれいに仕上げてくれるとくさんを頼っている。とくさんも「準スタッフやもんな」と自負している。

釜ヶ崎芸術大学(以下、釜芸)は、ココルームのスタッフとあまぶーと呼ばれるアートマネジメントプロフェッショナルチームが企画・運営をしている。参加者は、釜ヶ崎地域に暮らすおじさんたち、大阪府内から通う常連さん、またココルームのゲストハウスに滞在している国内外からやってくる旅人たち。たまたまココルームを訪れたお客さんにも声をかけて参加を誘うこともある。

釜芸はいわゆる参加型の授業形態になっている。ひとつひとつの授業に入ってみると、講師が教え、参加者が学ぶという関係性ではないことがわかる。人気の「おかゆの講座」でたこ粥をみんなで作ったときには、魚に詳しい釜ヶ崎のおじさんが、たこの種類について話し始めたり、北海道のたこが獲れた地域で暮らしていたときの話をしたり、参加者が講師の知らない知識を披露する場面もあった。そこにいる人たちが混ざり合って存在している。

釜芸は各講座をスタッフとあまぶーが準備をして、参加者を迎えるというものであるが、と

くさんの存在はそのような参加者とは異なる。ココルームで釜芸の広報活動の前準備が始まる。カバーレターの作成と印刷、名簿の整理、封筒やシールの準備まではスタッフが行い、その後はとくさんに引き継がれる。封筒にシールを貼りながら、チラシを待つ。チラシが届けば枚数を数え、封筒に入れていく。朝一のスタッフがやってくる6時頃、とくさんはココルームにやって来る。それでも作業が残るときは、早めの夕飯を済ませて17時頃再び作業に来てくれる。釜芸を支える存在である。とくさんは釜芸の講座にはほとんど出席したことがない。なんで釜芸に出ないの？と聞いたことがある。

参加費がカンパ制やん。

ま、われわれにはかまへんっていうけど、  
そうはいかへんやん、みんないれよったら。  
外の人もくるしな。

自分だけいれんとな、

知らん顔しとるのってできひんやん



とくさんと並んだ著者

もし目に見える現実がこういう表現できる人たちの現実だけだったら、確かに存在するマイノリティ当事者（世界の野宿者や難民や性的少数者など）の姿が見えないものになってしまう。この当事者は日常的に差別や暴力にさらされて自信をなくして表現したくないとかできないようになる。表現の終わりというのは個人の中の世界と外の世界とのコミュニケーションの終わりということだ。この当事者たちの言葉にされない中の世界（経験、意見、感情）はあるのだが、見えないものは存在していないことと同じだとよく思われている。この人たちの存在は問題ではないようだ。表現するのは、自分の創造力、視点や存在を取りもどすことだ。表現するのは、自分の値打ちを取りもどすことだ。しかし、久しぶりに表現するのは難しい。私はココルームで表現できるように自分を癒そうとはじめた。

毎朝のようにココルームのスタッフと一緒にラジオ体操をして、体の存在と大切さに気づく。ラジオ体操以外にココルームの決まったルーチンは多分ないと思う。日常的なできごと、準備したイベント、色々な思いがけないできごとがあって、人生のゆたかさ、人の多様性がよくわかった。利益とかデキるとか全然関係なく、仕事は人間のためのものだ。ココルームでは人と人のつながりが中心だから、カフェにいる人とお茶を飲んだり話したりするのも仕事だ。時々ゲストハウスの掃除を手伝っていた。家事労働の重要度をわかる人と

一緒にやったからよかった。家具を直したり塗ったり、庭の無花果<sup>イチザク</sup>を取ったりカンバンとフライヤーの絵を描いたり、ご飯を準備したり保健室や夜回りや釜ヶ崎芸術大学で手伝ったり参加したり、海外の保険会社との交渉もやったことがあった。

活動はほとんどが合作的だけど、個人プロジェクトもできる。例えば手紙を書く会や即興演奏会など。私は応援されて自分のプロジェクトをやった。ココルームのメンバーの応援と釜ヶ崎に暮らす人の参加のおかげで、「PHOTO声」というドキュメンタリーみたいに写真と声を使って街の大事なことについてストーリーを伝えるプロジェクトと発表会をできた。「THE PEOPLE'S 映画祭」という映画とコミュニティを通して、幅広い社会的な問題を一緒におしゃべりするイベントもスタッフと一緒にやった。個人プロジェクトだけだと人のつながりが強いコミュニティの影響でなんとなく合作的な感じが出てくる。

ココルームの仕事は色々な意味があって、どの意味も同じように大切です。釜ヶ崎のこれまでの労働運動の影響かもしれませんが、ココルームは働くひとの経験を意識して運営されている場です。ココルームの人々は労働効率とみられなくて、色々なアイデンティティや多彩な能力をもつとみられています。こういう意識があり、釜ヶ崎の変化を目の当たりにしていることもあって、いまの釜芸が大事にしているのは、そのときそのときの参加とアーカイブです。

ココルームの夏は蒸し暑かった。庭にある広い葉っぱの上でお水を飲んでいる蜂も休憩しました。この休憩の間に受粉できます。人は動かなくても、存在さえすればお互いの人生を動かせる。お互いにエネルギーも授受できる。この人生にいろいろな重いことがたくさんあっても、毎日ココルームで一瞬は心と足が雲の上に立っているように軽くなる。自分の存在の大切さを発見し、アートでこの存在を表現したいようになった。癒すとはこういう意味。

治癒には<sup>ゆる</sup>救しが必要です。自分を許すのは人を許すより難しい。しかし、釜芸でみんなの作品や存在を褒めたり祝ったりするのと同じように、少しでもあの優しい言葉を自分に繰り返します。釜ヶ崎芸術大学でお互いの素人さをゆるします。学ぶべきことも多くて忘れるべきことも多いけど、このゆるしゆるされる街・釜ヶ崎で、わたしたちは自分の手に筆を取り戻す。

## Betty Nguyen

Betty Nguyen is a fourth year biology student and an amateur multimedia artist who believes in using art for self, community, and intergenerational healing. She cares deeply about social justice for marginalized communities.

### ベティ・グエン

生物学の学生でアマチュア・マルチメディア・アーティストです。アートで自己、共同体、世代間を癒すことができると 생각합니다。疎外されたコミュニティのための社会正義に興味があります。





improvisational sound art creation event. I was encouraged to initiate my own projects and received ample support throughout the process. In the end, with the participation of Cocoroom members and people in the community, I was able to create and present PHOTO KOE, photo-voice-documentary film series and a co-host THE PEOPLE'S EIGASAI, a film festival focused on social issues. Yet, perhaps as a reflection of the strength of interpersonal bonds in the community, even in these individual projects the predominant sense of collaboration resurfaces.

The nature of work at Cocoroom escapes a singular definition, and all definitions are equally valued. Perhaps being associated with an area so historically linked to the labor movement, Cocoroom operates consciously of the worker's experience. Members of Cocoroom are not seen solely through the efficiency of their labor but rather as humans containing multitudes of identities and abilities. With this mentality and in the face of the changing landscape of Kamagasaki, Kama Gei's recent focus is placed on participation and archival, vital activities that are dependent on a person's simple momentary presence.

The summer at Cocoroom was warm and humid. In the garden, even the bees rested atop wide green leaves to drink water from the pots. The pollen on an insect's body can only spread

to another flower when it lands to rest. Even when we are not working, our presence is enough to bring life and energy to others. The weight of existence is heavy, but every day at Cocoroom, if just for a moment, my feet and heart felt light as if I were standing atop the cloudlike umbrellas in the terrace. I was able to rediscover the worth of my own existence and regain the will to embrace it through art, and that is what I consider healing to be.

Healing requires forgiveness. It has always been easier to forgive others than to forgive myself. However, in Kama Gei, as I celebrate the creations and existences of my peers, I begin to repeat the same words of acceptance to myself. In this arts university, we forgive each other for our amateurism, for what we have yet to learn, and for what we are still working on to unlearn. In Kamagasaki, a town to forgive and to be forgiven, we take the brush back in our hands.

アートで自分を癒す前に、アートをまた使えると思えるくらいまず自分を癒すべきだ。私たちは元々アーティストだと思う。子供の頃は正しいアートとかうまいアートとか値打ちがあるアートというコンセプトをまだ持っていなかったから、世界のことを初めて体験して下手くそな絵や幻想的なストーリーで楽に自分の現実を表現できた。しかし、理想的な人を厳しく決めている社会に入ったら、元々のアーティストがなかなか出てこなくなってしまう。このアーティストの存在が苦しくなる。こういう競争的な社会、デキることばかり評価する社会に入って、自分の中のアーティストが少し遠くなり、外のプレッシャーで麻痺したみたいになり自己表現することが非常に難しくなってしまった。私だけじゃなく、こういう状況は他の人もありそうだ。ぜんぜん自己表現せずにクリエイティブ世界と完全に離れることになっている場合もありそうだ。珍しくアーティスト精神を持ちつづけられた人は、個人的な現実を人間に共通するものとして表現できるし理解もされるし受け入れられることもできるようになる。

筆者が描いた釜芸のためのポスター



# Exiting the Cocoon

A Vietnamese American student's  
2 month experience in Cocoroom

さなぎ

## 蛹を出す

ベトナム系アメリカ人の留学生ベティの  
ココルーム 2 ヶ月滞在記

Betty Nguyen ベティ・グエン

Before we can use art to heal ourselves, we must be healed enough to feel ready to use art again. We all once used art; as children, when we interpreted the world for the first time and regurgitated our inner realities in the form of fantastic stories and crude drawings, we did so without the concept of correct, good, or valuable expressions. However, in a social order that has strictly decided what is correct, good, and valuable, our inherent artists struggle to survive. At some point as I entered this competition-based and achievement-focused society, I became distanced from my personal expression and let it fall victim to the paralyzing external pressures of performance. I believe that I am not alone in this experience. Others have completely lost connection with the world of creation. Those who successfully sustained their

artistic spirit, while anomalies, are the ones who get to have their personal realities expressed, validated, accepted as the common human reality.

The problem of having only a select group of people curate the commonly accepted reality is that certain existences become unseen -- often the world's indigenous, homeless, refugee/immigrant, mentally ill, disabled, LGBTQ+, and other minority groups. These marginalized groups that are implicitly and explicitly invalidated by the outside world on a regular basis through discriminatory policies and violence can be discouraged and/or barred from creation. A cease in creation marks a break in the communication between an individual's inner and outer world. While the undocumented experiences of these people should be inherently valid, to others, invisibility may equate nonexistence. Their problems no longer seem real and their lives seem to no longer matter. To create is to reclaim the validity of our creative potential, our perspectives, and our existences. To create is to reclaim our worth. But when this invalidation continues for too long, creativity atrophies. At Cocoroom, I was able to start a healing process to exit my own creative dormancy.

On a regular day, I would perform radio calisthenics with my coworkers. Perhaps this daily reminder of my body's existence and

importance was the only regular routine throughout my days as an intern in Cocoroom. Minute everyday occurrences, organized events, and sporadic, unexpected happenings reflected richness of life and the variety of human experiences in the space. Work was neither profit- nor performance-based. Rather, it was people based. I would have tea and start conversations with people who were present, and in a space that centers the connection between people, this would too be considered work. Sometimes I would help out with cleaning and upkeeping the guesthouse together with people who too acknowledge the domestic labor that society often undervalues. I painted pieces of wood to be used in an orchestra, reupholstered a chair, picked figs from the tree in the garden, created signs and event flyers, prepared a barbeque, contacted a Dutch insurance company after a fire extinguisher accident a guest caused, took the blood pressures of passersby, participated in Kamagasaki Art University (Kama Gei) events, wrote records and reflections, and gave out rice balls and tea to people who were living on the streets at night.

While everyone performs these activities collaboratively, the environment also supports individual initiatives. Members of Cocoroom are often able to use the space and support systems to explore their own personal projects. This includes a letter writing event and an

## 論考編 目次

“Earnest Words” Articles contents

---

### 釜ヶ崎芸術大学を別の角度のことばで編む

- 80 Exiting the Cocoon Betty Nguyen  
蛹(さなぎ)を出す ベティ・グエン
- 77 釜芸の課外で 松本渚
- 75 「カマハン」のあった4ヶ月とそれから 田中均
- 68 釜ヶ崎芸術大学のデータ一覧

### 実施記録

おでかけ釜芸

これまでの助成

メディア掲載

テレビ取材

新聞記事

### NPO The Room for Fullness of Voice, Words, and Hearts (Cocoroom)

Cocoroom is an art NPO (non-profit organization) managing Kamagasaki University of Arts. Our activities started in 2003. Having roots in the community, Cocoroom is creating opportunities of meeting people with different backgrounds, expressing and studying each other. We opened a guesthouse in April 2016.

2-3-3 Taishi, Nishinari-ku, Osaka, Japan 557-0002  
+81-6-6636-1612 info@cocoroom.org www.cocoroom.org

### Kama Gei (Kamagasaki University of Arts)

Anyplace can be a university if there are people who want to study. We make our activities regarding the neighborhood as a university. Kamagasaki University of Arts is managed by a non-profit organization "The Room for Fullness of Voice, Words, and Hearts (cocoroom)". This is a community university and anyone around the world can join. We offer various kinds of workshops and lectures. Each lecture lasts two hours. Although we may speak in faltering English, please join us if you are interested. The entrance fee is based on donation. We upload schedules in English on Facebook, so please check them too.  
<https://www.facebook.com/cocoroom/>

釜ヶ崎芸術大学を別の角度のことばで編む

---

探求精神で釜芸をみつめると

さまざまなひっかけりを とらえる

どうして、こんなことになってしまうのか

なぜ、つづいているのか

行き先は、あるのか

研究分野の異なる人々が

それぞれの関心に照らして編む